聖なる剣を束ねる英雄～女神アストレアに誓う、僕は僕の【正義】を貫く！～

クロウド、

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼い頃から少年はよく夢を見た。ここと違う世界、世界を守るために戦う剣士達の物語。

ある日、夢の中で彼らが声をかけてきた、少年は彼らに言った「僕もあなた達のようになれますか？」と。それから、彼は夢の中で彼らの弟子となった。

そんななか、黒い神が彼の家族を連れて行ってしまった。少年はそれを追いかけ世界の中心迷宮都市オラリオへ。

そこで、正義の女神の眷属となった彼は無事家族を取り戻し、冒険者として生きることを決意する。

だが、ある事件のせいでモンスターから家族を守るために身の丈に合わぬ力を使い深い眠りにつく。

そして、目が覚めると……五年の月日が経っていた。

目次

再開する物語 ―――― 1
【アストレア・ファミリア】――― 6
【ロキ・ファミリア】と正義と自己満足 15
豊穣の女主人 ―――― 22
そして加速する物語 ―――― 30
吹き荒れる暴風、斬り裂く雷鳴 ― 41
己の正義 ―――― 55
ステータス ―――― 67
早朝訓練 ―――― 80
悪の胎動 ―――― 87
太陽と光寵童 ―――― 91
時計の針は壊れていた ―――― 96
クロスセイバー登場記念・とりあえず書いてみた！ ―――― 109
過去【静寂】ｖｓ大鐘楼の【炎の剣士】 120

再開する物語

「フッ！」

『グギャ！』

「ふぅ、久しぶりだけどあんまり違和感はないな……これもユーリのお陰かな」

僕は燃える炎のような赤いエンブレムの付いた愛剣【火炎剣烈火】でゴブリンを斬り裂くと、体の感覚を思い出すように剣を握りなおす。やっぱり、夢での修行とあんまり感覚は変わらないな。

ただ、髪がちょっと邪魔だな……。アストレア様やアリーゼさんが手入れしてくれたって言ってたから切りづらいんだよな。僕は後ろに結んだ白い髪に触れる。

さて、と。これ以上潜ると輝夜さんから怒られるだろうし、今日はこのへんで帰ろうかな。まだ退院してから二週間くらいしかたってないし、下に潜るのはもうちょっとしてからかな。

そう考えて踵を返そうとすると、僕の耳に聞き覚えのあると遠吠えが聞こえてくる。お義母さん譲りの耳の良さがなかったら聞こえない距離だけど、今のは確か……。

「ミノタウロス？なんでこんな上層にいるんだ？」

通路の奥から現れたのは僕の倍くらいの大きさの体を持つ牛人のモンスター、ミノタウロス。本来なら十五階層くらいにいるはずのモンスターがここにいることに疑問を持つ。

『ヴヴォオオオオオオオオオオオオ!!』

ミノタウロスは僕を標的として見定めたのか、拳を振り上げてくる。流石に正義の眷属の一人としてこんなところにミノタウロスを残しておくわけには行かないから倒していかないとね。

『ヴヴォッ!?』

僕はその拳を火炎剣で正面から受け止めた。一歩も下がることなくそれを受け止めた僕にミノタウロスが驚愕の声を挙げる。正面から受けたから衝撃が体を突き抜けるが師匠の【大断断】に比べればどうということはない。

「【我が手に来たれ――――】」

【土豪剣激土!】

僕は詠唱を口ずさみ左手に灰色の巨大な大剣を召喚しそれをミノタウロスの胴体めがけて真一文字に振り抜く。

「シッ……!」

ブォンという巨大な剣が空を斬る凄まじい音とともにミノタウロスの体は上下に

真っ二つに避け上半身はそのまま後ろに吹き飛び、下半身はこちらに倒れてきたので血がつかないように後ろに避ける。

「やっぱり土豪剣は重いな……。」

僕は大剣【土豪剣激土】を肩に担ぎ、体の感覚を思い出す。

その時、僕の頬をダンジョンの奥から流れてきた風が撫でる。そして、僕はこの風に覚えがある。師匠のような荒々しい風でもなく、リューさんのような静かな風とも違うこの風の感じはもしかして……。

視線を風を感じる方向に転じるとそこには僕を見て固まっている金髪の女性が立っていた。鎧を纏っている姿は昔とは違っていたが、この懐かしい風とあの綺麗な金色の髪を見間違うはずはない。

「えっと、お久しぶりです……アイズ、さん?」

「ベル、なの……?」

「はい、ベル・クラネルです」

僕が若干言いよどみながら挨拶をするとアイズさんは面を喰らったような表情になると、目尻に涙を浮かべ、そして、次の瞬間僕の体に軽い衝撃が走る。

――――どうやら、それは彼女に抱きつかれたということに脳が理解するのに一瞬の間が必要だった。

「えっ、えぇぇ！アイズさんッ!!?」
「良かった……本当に、良かった……！」
　アイズさんは僕の頭と腰をしっかり掴んで抱きしめてくる。ど、どうしよう、逃げられない!?そういえばアイズさんってＬｖ．５になったってアストレア様言ってたっけ、これがステータス差の暴力か!?アリーゼさんといいこんなことにステイタスを使わないで欲しい！
　いくらこうして話すのが五年ぶりだからっていきなりこれは……誰かに見られでもしたら。
「おい、アイズ!!クソ牛はどうし……って何してんだお前ッ!?」
「あ、ベートさん……。」
　しかし、それは唐突に終わりを告げた。アイズさんと同じ方向からやってきた灰色髪の狼人が僕たちの姿を見せ怒声を上げる。その声に反応してアイズさんはホールドを解除する。アイズさんは少しムッとして振り返るだけだが、僕はあの姿を見られたと気づいてボフンと顔が熱くなる。
「じゃ、じゃあ、アイズさん……僕はこれでぇぇぇぇぇ!!!」
　アイズさんの手が離れたすきに僕は二人が来たのとは反対方向へと駆け出す。ダッシュで！

「あっ、ベルッ！」
「テメッ！待ちやがれッ！」
「失礼しましたぁぁぁぁぁ!!!」
二人が呼び止めようとする声が聞こえるがそれを無視して僕はひたすらに走る。火炎剣と土豪剣を消すのも忘れて。
――――アイズさんこの五年で色々凄くなってたな……。

【アストレア・ファミリア】

――――暗い空間で二人の剣士が己の剣をぶつけ合う。

「ふっ！ハァッ!!」

「ッ！」

片や右肩に鉄仮面をかぶった竜の頭部を模した装飾が凝らされた鉄仮面の仮面の剣士【仮面ライダーカリバー　ジャアクドラゴン】、片や五体の竜をかたどった鎧を纏った金と紫の剣士【仮面ライダーカリバー　ジャオウドラゴン】。ただ、二人が使っている剣は同じ禍々しいオーラを放つ紫の剣だった。

「これでっ、決めるッ!!」

カリバー・ジャアクドラゴンはベルトに装填されていた【ジャアクドラゴンワンダーライドブック】を引き抜くと、持っている剣【闇黒剣月闇】の速読機【ジャガンリーダー】に三回連続で接触させワンダーライドブックに記された物語を読み込ませる。

【必殺リード！】【必殺リード！】【必殺リード！】【ジャアクドラゴン！】

「はあぁぁぁぁぁぁ!!」

【月闇必殺撃！】【習得三閃！】

紫の炎を纏う剣を振り下ろすと同時にトリガーを引くと、斬撃が竜の姿となって金色の剣士へと向かっていく。だが、カリバー・ジャオウドラゴンは避ける様子を見せず、バックルに装填されている巨大な本を閉じる。

【邪王必殺読破！】

闇黒剣のグリップエンドでバックルの上部のスイッチを押し込むと再び本が展開され、本の中に収まっていた五体の竜の顔が展開されその瞳が怪しく光る。

【邪王必殺撃！】

「ハァッ！」

ジャオウドラゴンが剣を振り下ろすと一体の紫の竜と四体の金色の竜、計五体の竜が渦を巻くように放たれる。五体の竜はジャアクドラゴンが放った竜を蹴散らし、彼に向かっていく。

「ぐぅう、うわァぁぁぁ!!!!!」

闇黒剣でガードしようとするが五体の竜による攻撃が直撃しジャアクドラゴンは吹き飛び、地面に転がる。そして、彼を纏っていた仮面と鎧が本のページのようにパラパラと舞い散ると白髪の少年の姿に戻る。

すぐに闇黒剣を杖にして立ち上がろうとするがその少年の首元にジャオウドラゴンが持つ闇黒剣の鋒が突きつけられる。喉元に突きつけられた冷たい刃にゴクリと喉を

鳴らすがその剣はすぐに降ろされる。
ジャオウドラゴンがベルトの本を閉じて引き抜くと、彼の鎧もページが舞い散るように崩れ黒髪の青年へと姿が戻る。そして、剣の代わりに手を差し出す。少年がその手を掴むと引き上げて立ち上がらせる。
「やっぱり、まだ師匠には勝てませんか」
「いや、お前はもう十分に強い。俺もその年でそこまでは戦えなかった」
そう言って弟子である少年『ベル・クラネル』にいうのは彼の師匠の一人闇の聖剣【闇黒剣月闇】の持ち主、『富加宮賢人』。この状態の賢人をベルは通称『闇賢人師匠』と呼んでいる。
「今のお前なら、現実でカリバーになっても問題ないだろう」
「……。」
ベルはその言葉に今も握りしめる闇黒剣を見つめる。あのとき、自分が使ってしまった力。
そのせいで多くの人を悲しませたことだけは罪の意識がある。そのベルの考えを悟った闇賢人はベルに注意を促す。
「あのときお前を止めなかった俺が言えることではないが、お前がいなくなって悲しむ人間がいることを忘れるなよ」

「師匠……。」
　闇賢人がそう言うと暗かった空間に白い光が差し込む、やがてその光が空間全体をおおうと視界を白く染めた。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「ん、んぅぅ……。」
　窓から差し込む光を受けて僕は瞼を開く。
　頭はボーッとするなんてことはなく、妙に意識ははっきりしている。師匠達との修行の後はいつも目が冴えている。ただ、体はそうも行かないので少し重い感覚が残る。
　っていうか、アレ?なんかおもすぎない……?
　そこでようやく気づいた、僕の布団が不自然に盛り上がっていることに。というか、腰回りに何かがしがみついてる感覚があるような。
　恐る恐る布団を捲し上げると、そこには見慣れた赤髪のお姉さんがいた……。
「んぅ……。」
　僕の思考がフリーズしていると、赤髪のお姉さん、僕たち【アストレア・ファミリア】の団長『アリーゼ・ローヴェル』さんが目を覚まし僕を見つめる。そして、にこやかに笑うと、
「おはよう、ベルぅ……」

とりあえず、僕はいきなりの状況に脳が理解を追いつかず絶叫した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「全く、朝から何をしているのですかアリーゼ！」

「だってぇ、久しぶりにベルと寝たかったんだもの！ベルが可愛いのが行けないのよ！私は悪くないわ！」

「何という責任転嫁だ……。」

場面は変わって朝食の席。あの絶叫のあと、皆が僕の部屋に雪崩込んできて、寝間着がはだけているアリーゼさんを見てなんとも言えない雰囲気になった。ついでに『普通悲鳴あげるの逆じゃない？』とか聞こえたような気がするけど、きっと気のせいだ、うん。

そして現在、絶賛説教を受けながら全く反省していないアリーゼさんの無茶苦茶な言い分に金髪のエルフのお姉さん、『リュー・リオン』さんが呆れたように疲れたように額を抑えた。いいぞ、もっと言ってやってリューさん！

「まぁまぁ、いいではないですか。六歳の頃から一緒にいるのです、入浴すら一緒にしたというのに今更なにが問題だというのですか？」

「輝夜、そういう問題ではない！」

「あらあら、まさか今更になってこの兎様を雄として認識されたのですか？相変わらず、

脳内がロマンチックですね生娘妖精様は」
「輝夜、貴様ぁ！」
　話に割って入ってきた黒髪の極東美人、【アストレア・ファミリア】副団長のちょっぴり意地悪なお姉さん『ゴジョウノ・輝夜』さんがいつもの調子でリューさんを挑発する。
　いけない、このままでは僕も不利になってしまう。そう思い至りリューさんに加勢仕様と口を挟む。
「そうですよ、昔ならともかく僕だってもう１３歳なんですし……。」
「ほほう？十三歳になった？では、五年間貴方様は何をしていましたか？」
「えっ……それはその……。」
「五年間眠りこけていただけのくせして大人ぶるでないわ！そもそも十三歳も世間的に見たら立派な子供だぶわぁかめ!!」
「うっ、うぅ……アストレア様ぁ……！」
　僕は輝夜さん口撃に耐えきれず僕達の綺麗な胡桃色の紙の女神様『アストレア』様に助けを求める情けない声を出してしまう。アストレア様はほほえみながら輝夜さんに顔を向ける。
「輝夜。あまりリューとベルをいじめないで上げなさい」
「ふぅ……わかりました、アストレア様」

さすがの輝夜さんもアストレア様に窘められては何も言えない。
「ところでベル、もう体は大丈夫なの？」
「はい、昨日ダンジョンに潜ってきましたけど少し体力が落ちてる以外はもう問題ないです。多分、ユーリのお陰だと思いますけど」
「あ～、あいつの能力ってマジでメチャクチャだもんな」
「お陰で遠征は助かってるけどな」
今この場にはいないもうひとりの仲間、僕らのもうひとりの仲間であり僕の師匠の一人でもある人物？のことを思い出す桃髪の小人族の『ライラ』さんと狼人の『ネーゼ』さん。
二人の言う通り彼の能力はホントにメチャクチャである。記憶消したり、姿変えたり、おまけに傷を治せるとかポーションの意味がなくなるよ。
「それで？そのユーリはまだ帰ってないの？」
「はい、多分帰り道でなにか気になることがあって寄り道してるんじゃないかな？」
「あの好奇心旺盛な千歳児め……。」
リューさんのお説教から脱出したアリーゼさんの言葉に答えると、輝夜さんは呆れたように額を抑えた。ユーリには今、アストレア様の使いで僕が生まれ育った村に行ってもらっている。僕が目覚めたことを僕の育ての親に報告に行ってもらっている。

「まぁ、でも、怪物祭までには帰ってくるんですよね？」
「そうね、それまでには帰ってくるように言ってあるわ」
「ベルは巡回に参加するの？」
「そのつもりだよ」
　怪物祭というのは【ガネーシャ・ファミリア】が開催する、ダンジョンから連れてきたモンスターを調教して見世物にすると言ったものだ。その巡回も【アストレア・ファミリア】の仕事に含まれている。
「久しぶりのお祭りなんだから、ベルは普通に楽しんでもいいのよ？」
「でも、僕だって【アストレア・ファミリア】だし、ちゃんと仕事もしないと」
　僕がそう言うと、アリーゼさんや輝夜さんが微笑ましいものを見るように笑みを浮かべ、輝夜さんが僕の頭をなでてくる。
「相変わらず変なところで真面目だな、お前は。生真面目妖精の爪の垢でも飲んだか？」
「それは誰のことを言っているんだ、輝夜？」
「あら、わかりませんか？」
「はいはい、喧嘩はそこまでよ。それで、ベルは今日もダンジョンに？」
「はい、そろそろ剣だけじゃなくて本も使って戦いたいし」
　僕がそう言うと皆の表情に影が差す。それは当然といえば当然な反応だ、僕が昏睡状

態になった原因はその本にもあるのだから。

「そう……でもあまり無茶しちゃ駄目よ？あの剣を使ったりしなければ問題ないわ」

「……はい、わかってます」

アストレア様の注意に俯いて答える。そして、夢の中で闇賢人師匠に言われたことを思い出す。

あの言葉はきっと、賢人師匠だから言えたことだろう。僕自身、もうあんな事が起きないように剣士としての腕は磨き続けてきた。だから、もうあんな事にならない。絶対に。

――――そう心に誓い僕達は朝食を終えた。

【ロキ・ファミリア】と正義と自己満足

「え？ロキ様からお食事の誘い、ですか？」
「ええ、今日のお昼頃にロキがホームに訪ねてきてね」
　僕が久しぶりにダンジョンに潜ってからさらに数日がたったある日の夕食の後。アストレア様が切り出したことに皆、驚いている。【ロキ・ファミリア】といえばオラリオ最大派閥の一角だ。五年前に個人的にも何度か付き合いのある派閥だ。僕が目覚める少し前に遠征に向かったからアイズさん位しか僕が眼を覚ましたことを知らないはずだ。
「【ロキ・ファミリア】が遠征の打ち上げをするからそのときにベルの退院祝いをしないかって」
「あれ？しましたよね、僕の退院祝い？」
「いいじゃない、何度したって。それだけめでたいことだったんだから」
「だけど、あの【勇者】がそれだけでウチを呼ぶか？」
　アリーゼさんは乗り気のようだが、ライラさんは向こうの団長になにか考えがあるのかと勘ぐっているようだ。確かに、あの人色々考えてそうだし。

「次の遠征は貴方達と行くことになるかもしれないから、ベルの紹介もしておきたいんですって」
「あ～、今じゃベルのことを知ってる奴らって結構少ないしな。一部じゃ、死んだって噂もあったし」
「確かに五年間、昏睡状態でここまでもとに戻ったのは奇跡的だろうからな」
　アストレア様の返答にライラさんが納得するようにいい、輝夜さんが相槌を打つ。
えっ、僕って死んだことになってたの？いや、確かに五年も目を覚まさなかったらそうなるかもしれないけど……。
「それで、ベル？貴方はどうしたいのですか？」
「どうしたいって？」
「お前は行きたいのかということだ。この場合主役はお前なのだから、お前が決めればいい」
「留守番なら気にしなくていいぞ、あたし達が残るからアストレア様達と行って来いよ」
　リューさんと輝夜さんの質問とライラさんたちの気遣いに僕はう～んと考える。【ロキ・ファミリア】には知り合いが何人かいるし、久しぶりにあってみたいし、行きたい気持ちはある。
「僕、行きたいです」

「そう、なら決まりね！ベル、やっぱり楽しみ？」
「はいっ！久しぶりに皆さんに会いたいです」
　アストレア様の質問に笑顔で答える。今から楽しみだ。
「ベルって、【剣姫】ちゃんと仲良かったしね」
「そういえば、そうだったな。ベルが昏睡状態になったときには毎日のように見舞いに来ていたしな」
「え、そうだったんですか？」
　輝夜さんがなんの気無しにこぼした言葉に僕は反応する。そんな僕にリューさんが当時のことを話してくれる。
「はい、貴方が眠り始めてから一年は毎日のように。それからも頻度は落ちましたが月に一回は必ずと行っていいほどに」
「そっかぁ、アイズさんにも迷惑かけちゃったんだ……。」
「そうよ！あの事件で沢山の人が怒って悲しんだんだからッ！リオンなんて【ルドラ・ファミリア】にカチ込みに行こうとしたのよ！」
「ご、ごめんなさいッ……！」
　僕が漏らした言葉にアリーゼさんが当時のことを思い出したのか怒り出し僕の顔に自分の顔をズイっと近づけてくる。近い近い！あまりにも近いから反射的に謝っ

ちゃったよ……。
「というか、【ルドラ・ファミリア】にカチコミって……。」
「アリーゼ、その話は……!」
「あぁ、この直情妖精が珍しく烈火のごとく怒りだしてな。あの事件の発端になった【ルドラ・ファミリア】に報復に行こうとしたんだ、あわやファミリアの人間を皆殺しにするような顔をしていたぞ」
「輝夜、それはベルには話さない約束でしょう!?そもそも、報復に行こうとしていたのは私だけではないはずだ!」
「つうか、全員行く気満々だっただろ。ユーリとアストレア様に窘められなかったら行ってたかもな」
皆の顔を見ると、ものすごく気まずそうな顔をしているのでライラさんの言うことは本当らしい。
ライラさんの言葉に僕の気はさらに沈む。まさか、僕のせいで危うく皆の道を踏み外さ冴えてしまうところだったんだと思うと罪の意識が更に強くなった。僕の表情が暗くなるのを見て僕が何を考えてるのか悟ったリューさんが慌ててアリーゼさんと輝夜さんに言う。
「ホラッ、ベルが罪悪感を感じてしまったではないですか!?ベルの性格からしてこうな

ることはすぐにわかったはずだ。だから、この話はファミリアでは禁句にしようときめたではありませんか！」
「これくらいいっておいたほうがいいだろう、このアホ兎はそのままにしていたらまた同じことをやりかねんぞ」
「そうそう、ベルにはこれくらい言っといたほうがいいのよ。ベルの師匠達ってユーリが言うには結構甘いらしいし、姉としてしっかり行っておかないと駄目でしょ？そうですよね、アストレア様？」
「う～ん、そうね……ベルにはこれくらいが丁度いいんじゃないかしら？」
「アストレア様まで……。」
「ベル、貴方の覚悟は高潔なものだけど、そのせいで多くの人を悲しめることは貴方にとって正義なのかしら？」
「ちがい、ます……。」
「そう、それは正義ではなく自己満足よ。だから、もう皆を悲しませるようなことをしては駄目よ、わかったわねベル？」
「はい……わかりました。ごめんなさい、アストレア様、皆……。」
「うんうん、わかればいいのよ」
　いつのまにか近づいていたアリーゼさんが座っていた僕を抱きかかえて膝の上に乗

せて座ると頭をなでてくれる。こうして撫でてもらうのはいつぶりだろう？　五年前は良くしてもらった気がするけど、夢の中じゃもっと経ってたような気がするからすごく懐かしく感じる。

……なんか眠くなってきた。

――僕は食後のせいか心地よさのせいか、重くなった瞼が閉じるのを我慢できずそのまま意識が暗転した。

～～～

「あれ、ベル？」

「寝てしまったようだな」

私がベルを抱き上げて膝に乗せて頭をなでていると、いつの間にかベルの口数が減ったことに気づき輝夜が顔を覗き込んでみると、どうやら眠ってしまったらしい。そんなに私の膝の上は気持ちよかったのかしら♪

「こうしてみると、本当にただの子供のようですね」

「だよなぁ、これがＬｖ．４の冒険者って言っても誰も信じなさそうだぜ」

リオンとライラの言葉に心のなかで同意する。ホント、この見た目であの強さなんだから反則よね～。六年前には偶然保護したこの子が私達の家族になって何度も私達を助けてくれるまで強くなるななんて思いもしなかったのにね～。

すっかり、熟睡しているようで他の姉たちに頬を突っつかれたり頭をモフられたりしてもみくちゃにされているベルを見て感慨深くなる。

今こうして【アストレア・ファミリア】が全員揃っていられるのもこの子のお陰。五年前、闇派閥にはめられて絶体絶命になったはずの私達を村に帰省していたはずのベルがユーリに掴まって飛んできたときは驚いたけど。

でもそのせいで、ベルが昏睡状態になったのは本当に悲しかったし、だから一月前に目を覚ましてかすれた声ではあったけど、私達の名前を呼んでくれたときはもう号泣しちゃったわよ。輝夜があそこまで泣いてるの始めてみたわよ！

さて、と。そろそろ私も寝ようかしらね。

私はベルをもみくちゃにしている団員を引き離し自室に戻ろうとすると、

「待て、団長様」

「なによ、輝夜？」

「今夜は私の番だ。お前はこの間ベルのベットに忍び込んでいただろう」

クッ！自然に連れて行こうとしたのに、流石ね輝夜！

まぁいいわ、五年も待ったんだもの一晩くらい大したことはないわ！だけど、アッチの方の一番は譲らないわよ！フフン！

豊穣の女主人

――【ロキ・ファミリア】との約束の日。僕は久しぶりに歩くメインストリートを懐かしげに見ながら、2階建ての石造りの立派な酒場、【豊穣の女主人】にやってきた。

五年前にまだ開いたばかりのこの店には何度か来たことがあるけど、相変わらず立派なお店だなぁと思いながら、アストレア様、アリーゼさん、輝夜さん、リューさん、僕の五人は店の扉を押して中にはいる。

「ベルさん、来てくれたんですね！」

「シルさん、こんばんわ！今日はごちそうになります！」

店に入った僕に鈍銀色の髪の女性『シル・フローヴァ』さんが笑顔で出迎えてくれる。彼女と出会ったのは五年前にここに来たときだけど、五年の間にすっかり大人っぽくなっていた。僕が昏睡状態になってからも何度も見舞いに来てくれたらしいし、目を覚ました僕を見てアリーゼさんと同じくらい泣いてくれた人だ。

「ご予約のお客様、ご来店で～す！」

僕達五人は予約して開けてもらっていた一つのテーブルを囲む。

店の中を見回すがやはり【ロキ・ファミリア】の人たちは来ていないらしい。何故、僕

達が【ロキ・ファミリア】より先に来たのかというと、まぁ、なんというかロキ様とアリーゼさんの悪戯みたいなものらしい。

どうも向こうで僕が目覚めたことを知っているのは主神であるロキ様と向こうの団長とアイズさんだけらしい。ロキ様がこの場で僕が目覚めたことを発表して僕のことを知っている人達を驚かせたいと言い出してそれにアリーゼさんが悪乗りしたという感じだ。

アストレア様とリューさんは完全に呆れ果てていたけど、輝夜さんは意外と乗り気だった。

とりあえず、【ロキ・ファミリア】の人が来る前に食べすぎるのもあまりよくないし、とりあえず軽めのものを食べておこうとスープとかパンの軽食を頼んでおく。

「それで、ベル？本はちゃんと使えたの？」

「はい、もう三冊まで問題なく使えました」

「もう三冊まで使ったのですか？」

「うん、一冊でも十分強いけど遠征に行くなら二冊以上は使えないと」

「確かに一冊と二冊の差はかなり大きいからね～。」

「でもやっぱり、体が少しなまってる気がするんだよね」

「ベルの目標は遠征までに体の感覚を戻すことだな」

食事をしながら、体の調子について尋ねてくる皆。僕自身体の調子は驚くほどに問題ないけど絶好調とまでは行かない。次の遠征までにはなんとしても体の調子をもとに戻さないとなぁ。

筋トレとかして筋肉量を増やしたほうが良いかな。

「ご予約のお客様ごらいてんにゃー！」

そう考えていると見覚えのある猫耳の猫人が店中に広がる声で叫ぶ。

どうやらついに【ロキ・ファミリア】がやってきたようだ、赤髪の女性主神である女神『ロキ』様を筆頭に団長であり【勇者】の二つ名を持つ金髪の小人族の男性『フィン・ディムナ』さん、副団長で確か王族のエルフの翡翠色の髪の女性【九魔姫】の二つ名を持つ『リヴェリア・リヨス・アールヴ』さん、【重傑】の二つ名を持つ屈強なドワーフの男性『ガレス・ランドロック』さん。

そして、この間ダンジョンで再会した【剣姫】の二つ名を持つ『アイズ・ヴァレンシュタイン』さん。

三人はあまり変わらないけど、アイズさんはやっぱり変わったな……。なんというかカッコよくなったというか綺麗になったと言うか……。

そう思っていると両脇から僕の頬をむにっと掴まれた。

「いひゃい、いひゃいよ……あひーれひゃん。はふやひゃん」

「いつまでも見惚れてるんじゃないこの阿呆が」
「そうそう、こっちを見ていなさい」
　パチンッと同時に僕の頬を引っ張っていた手が離れ同時にゴムみたいに頬が戻りちょっと赤くなる。なんかちょっと理不尽じゃない？
　というか、そろそろ合流したほうが良いんじゃないかとアストレア様を見ると、アストレア様はふぅとなんか疲れたふうにため息をはくと【ロキ・ファミリア】の方を指差す、すると、ロキ様がこちらを見てしーっと口元に手を当てた。
　どうやらまだ黙っていてくれってことらしい。

「よっしゃぁ、ダンジョン遠征みんなご苦労さん！今日は宴や！飲めぇ!!」
　ロキ様の音頭で同時に『ガチン』というグラスを合わせる音とともに宴が始まる。
　灰色髪の狼人の方を始め、はじめて見る人も何人もいて僕はその姿に時間の流れを感じて少し寂しく感じてしまう。そんな事を考えていると、例の狼人の方がアイズさんに詰め寄る。
「おいっ！アイズ！そろそろ話せよ!!」
「ベートさん？なにをですか……？」
「とぼけんなって！遠征から帰る途中で何匹か逃げ出したミノタウロス！最後の一匹を

追いかけてご改装まで戻ったとき、俺が追いついたときにお前が抱きついてた白髪のガキのことだよッ！」

『『!?』『!!』』

あっ、やばい……。

灰色髪の狼人の方が【ロキ・ファミリア】の団員だけでなく他の客にも聞こえるように叫んだ。全員がギョッとして、一気にアイズさんに視線を転じる。『あの【剣姫】が男に抱きついた!?』『え?アイズ、マジで!?』『うううううう、嘘ですよね、嘘だって言ってくださいよアイズさん！』とか、あの一角が完全にカオスな状態になってしまっている。特に山吹色の髪のエルフさんが酷くうろたえている。

だけど、僕は今それどころではない。

「ベル、どういうことかしら?」

「ベル、どういうことだ?」

「ベル、どういうことでしょうか?」

上からアストレア様、アリーゼさん、輝夜さん、リューさんが底冷えするような低い声で矢継ぎ早に僕を質問攻めする。まるで凍りつくような冷たい視線で僕を見つめる四対の瞳。

というか、あの人白髪の子供って言っただけなのになんで速攻で僕を睨むんだ？
「【剣姫】が抱きつくような白髪の小僧などお前しかいないからだろうが」
「当たり前のように考えを見抜かないでよぉ！」
「ダンジョンで逢引きとはウチの兎様は思っていた以上に元気なようですね」
「ただの偶然だって!!」
サラッと僕の頭の中を覗き込んだような回答をする輝夜さんに泣きたくなる思いで抗議する。すると、いきなりアリーゼさんが体をこちらに向け両手を広げる。僕だけじゃなくてアストレア様達まで、何してるんだろうって思っていると、
「さぁ、ベル。誰かに抱きつきたいなら私の胸に飛び込んできなさいッ！」
「もう意味分かんないよぉ！というか、僕の方から抱きついたわけじゃないし！」
「抱き合いはしたのね？」
「……あ」
まさかの誘導尋問に僕がポロリとこぼした言葉にアストレア様達がはぁと額を抑える。なんだろう、物凄く呆れられているような気がする。

「……ッ」

「団長、どうかされましたか？」

「おい、アイズ。まさかその白髪の子供というのは……！」

「ねぇねぇ、アイズ。その子ってどんな子～？」

「アイズさん答えてください！一体どこの馬の骨ですか!?今すぐ、消し飛ばして……！」

一方、【ロキ・ファミリア】側ではことの事情を知っていて笑いを必死に堪えるフィンさんとロキ様。その相手が僕だと察してアイズさんに確認しようとするリヴェリアさん。そして、僕について好奇心で聞いているアマゾネスの姉妹の方の一人と、さっきから異常に狼狽えてなにか物騒なことを言っている山吹髪のエルフさん。

流石にそろそろ出ていかないと収集つかないけど、一体どのタイミングでていったら良いんだろうとアストレア様達に視線を向けると、「自分たちもわからない」と言いたげに首を横に振った。

ええ、どうすればいいのこの状況……。どうしたものかと思っていると、ロキ様が場を収集しようとしたのか笑いを噛み殺して狼人の方に声をかける。

「なぁ、ベート。その白髪の子って、ひょっとしてあのこの子とか？」

そう言って僕達が座っているテーブルの方を指差すロキ様。狼人の方を筆頭に一斉に僕らに、いや、『白髪の子供』である僕に視線が集中する。
「て、テメェッ！」
「あっ、ベル……。」
「ど、どうも……お久しぶりです……。」
僕に集中する無数の視線に僕はそんな言葉しか出すことができなかった。

そして加速する物語

「それじゃあ、古株のものは知っているだろうが紹介しよう。彼は【ベル・クラネル】。【アストレア・ファミリア】の冒険者だ」
「ど、どうも、ベル・クラネルです……。」
フィンさんに紹介されて僕はペコリと頭を下げる。僕の知っている人達やノリのいい人達はパチパチと拍手を送ってくれる。
一部、主に灰色髪の狼人さんや山吹色の妖精さんとか……。特に妖精さん人殺しの目してるんですけど!?
「次回の遠征は【アストレア・ファミリア】と合同になる可能性が高い。その時は彼にも主戦力として参加してもらうつもりだ。なので、彼の顔を覚えておいてもらいたいと思い。今日は彼女らに来てもらった」
「今日はウチのベルをよろしくね!あっ、でも手を出しちゃ駄目よ?その子は近いうちに私達の……」
「アリーゼ、それ以上はいけないわ」
「自重しろ、団長様」

「酒を飲みすぎだ、もう少し慎みを持ってください」
　フィンさんの説明にいつのまにかお酒を呑んでたアリーゼさんがなにかとんでもないことを言おうとしたような気がするが、アストレア様、輝夜さん、リューさんに窘められる。変わらないなぁ……。
「あれ、【アストレア・ファミリア】って男子禁制って話じゃなかったっけ？」
「いえいえ、そんなことはありませんよ【大切断】様？ただ、私共のファミリアに入りたいという殿方が下心の見え透いた方ばかりだったというだけですわ」
　ふふふと笑ってアマゾネスの双子の妹さんに悪い笑顔でそう言う輝夜さん。実際、ウチのファミリアにはたまにそういう人が来たらしいけど面接の時点でライラさんと輝夜さんに下心を見抜かれて追い出されたらしい。
「ベル……目覚めてくれて、本当に良かった」
「うむ、元気そうで何よりじゃ」
「リヴェリアさん、ガレスさん……。」
　僕が椅子に戻ると【ロキ・ファミリア】の歳古株であるリヴェリアさんとガレスさんが懐かしむように向かいの席から僕を見る。
「リヴェリア様、目覚めてってどういうことですか？」
「そうか、まだ言ってなかったなベルは五年前にとある事件でスキルの反動を受けて今

まで昏睡状態だったんだ」

『『『!!?』』』

リヴェリアさんの言葉に僕のことを知らない方は全員驚愕の表情を浮かべる。自分でも五年も眠っていた人間にしてはあまりにも普通の生活をしているので信じられないと言った表情だ。しかし、副団長であり、そういった冗談を言う人ではないリヴェリアさんの言葉が嘘でないとわかっているのでさらに驚きの色が濃くなる。

しかし、そんな団員のことは放ってリヴェリアさんは僕に質問を始める。

「それで、いつ目覚めたんだ?」

「つい、一ヶ月前ですリヴェリア様」

リヴェリアさんの言葉にリューさんが敬語で答える。リヴェリアさんは王族のハイエルフらしくて、オラリオのエルフ達はほぼ全員彼女に敬意を払っているらしい。

「一ヶ月というと、儂らが丁度遠征に出た頃じゃったな」

「ほんと、なんの前触れもなく目覚めて驚いちゃったわよ〜」

「おまけに半月で退院できるまで回復したので、珍しく「どんな体してるんですか!」とご乱心される【銀の聖女】様を見るのは中々愉快でした」

純粋な感想を言うアリーゼさんと当時目覚めた僕を見て発狂しかけ、僕が半月で日常生活ができるまでに回復すると完全に目を回していたアミッドさんを思い出し笑みを

零す輝夜さん。

……僕が悪いわけじゃないのに、なんだろうこの罪悪感。

ここにはいない恩人に心のなかで合掌して謝罪する。

「アイズとフィンは知っていたんだろう？何故教えてくれなかった？」

「ロキが黙ってろって……。」

「同じくだ」

「そっちのほうがおもろそうやろ？実際、さっき泣きそうな顔してたやないかママ」

「だ、誰が泣くか!!馬鹿を言うな！というか、誰がママだ!!」

ロキ様の言葉にリヴェリア様は珍しく取り乱して怒鳴り返す。この光景も久しぶりだなと、懐かしんでいると背後から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「「ベル、久しぶり（っす）ね」」

「ラウルさん！アキさん！」

振り返った先にいたのは人族の男性と黒髪の猫人の女性、ラウル・ノールドさんとアナキティ・オータムさん通称アキさんだ。久しぶりに見た顔なじみの二人に僕は笑顔を浮かべて体を向ける。

「本当に良かったっす！俺はてっきりもう目覚めないのかと……！」

「ほんとよ！でも本当に目覚めてくれてよかったぁ！」

「心配かけてすみませんでした……でもこうして今はピンピンしてますから！」
「そっすか……それならなによりっす」
「うんうん」
　二人とも若干涙目になってそう言ってくれる。それだけ、心配し僕が目覚めてくれたことを喜んでくれていることがとても嬉しかった。僕が元気でいることをアピールするとふたりとも目元を拭って喜んでくれた。
「ねぇねぇ、二人は知り合いなの？」
「え？まぁ、そうっすね。レベルが近かったのと、派閥間の仲が悪いわけでもなかったし、よく一緒にダンジョンに潜ったことがあるっす」
「でも、私達あっという間に追い抜かれてね……そこから頻度は落ちたけど何度かは一緒に潜ってたのよね？」
「はいッ！」
「ホントは私達が行きたかったんだけど、その頃ってうちの派閥って色々忙しかったのよね」
　アマゾネス特有の褐色の肌の女の人がラウルさんとアキさんに質問をし、僕がそれに答えるとアリーゼさんが悔しそうに俯いてジョッキをテーブルに叩きつける。ひょっとして酔ってる？

　そういえばアマゾネスの人が同じ顔の人が二人いるから多分姉妹なのかな？多分こっちの活発そうな人が妹さんでもうひとりのフィンさんにベッタリの人がお姉さんかな？
「え？ちょっと待って、五年前から恩恵を貰ってたってことはその頃から冒険者だったってこと？アンタ、いくつよ？」
「十三歳です」
　今度はアマゾネスのお姉さんのほうが質問してきたので特に気にすることもなく答えた。すると、皆さんから驚いたような顔をする。まぁ、当時は僕７歳だったし。
「活動していたのは一年半位だけど当時のオラリオじゃベルはそれなりに名のしれた冒険者だったんだ。君達も名前くらいは知っているんじゃないか？【聖刃】の二つ名を」
「団長それって確か、一年半でＬｖ．４になったっていうレコードホルダーのことですよね？」
「え？じゃあ、ひょっとして……！」
「はい……僕が、【聖刃】の二つ名を貰った冒険者です」
　僕が答えるとさらにざわめきが大きくなる。どうやら、僕とその人物のイメージがあまりにも合わなかったらしい。
「あれ？でも、その人って確か死んだんじゃ？」

「ティオナ、ベルは死んでない……！」
「あ、アイズ？それは見ればわかるからそんな怖い目向けないでよ……。」
妹さんの言葉にさっきから僕の頭をモフモフしてたアイズさんが鋭い目つきで妹さん、ティオナさんを睨む。それはそうと、僕はそれより鋭い目をアイズさんの背後の山吹色の妖精さんに向けられているのですが……。
「馬鹿ティオナもそうだけど、アイズもそんな目向けないの。五年も昏睡状態だったのよ？死んだって噂が流れても不思議じゃないわよ」
「ティオネ……でも、ベルは起きた」
「あのねぇ……。」
お姉さん、ティオネさんが二人をたしなめるけど、アイズさんは相変わらずどこかずれた答えを返す。どう、フォローしたものかと思っていると、お酒を飲んでいたロキ様が酔っ払ってるのか頬を赤らめて口を開いた。
「まぁ、でも死んだって噂が流れたのはラッキーだったかもしれんな」
「「……。」」
「ロキ、それはどういう意味かしら？」
「ちょっ！別にやましい意味で言ってるんやないで!?寧ろベルを心配していってるんやで」

ロキ様の言葉に対し、アストレア様はとても怖い笑みで問いかけ、その背後から冷たい眼が三対。流石にそれを見て酔いがさめたのか慌てて弁解を始める。
「確かに、あの頃のオラリオでベルが昏睡状態になっているなどと噂になれば、どうなっていたかわからんな」
「リヴェリアそれって、どういう意味？」
「詳しくはいえんが、ベルには優秀な危機察知スキルがある。それを使って碌でもない輩を虱潰しにしていたせいで目をつけられた、それだけだ」
「おまけに百発百中やったしなぁ、ほんと、これから起こることを見たのかって思う、レベルで。なぁ、ベルぅ？」
「「「……。」」」
「やだなぁ……。
冗談やめてくださいよ、ロキ様」
後ろに回り込んできたロキ様が僕の方に腕を回しながらトレードマークの糸目を珍しく半開きにして僕の前でニタァと笑う。ロキ様が言わんとしていることを悟っているアストレア様達は目元を険しくする。当然、僕もそのせいか声が一段低くなった気がする。
だが、次の瞬間ロキ様の頭部に平手打ちが飛んだ。

「あだっ！何すんねんママ！」
「誰がママだ。お前が馬鹿なことを言うからだろう。ベルを困らせるな」
平手打ちの主であるリヴェリアさんは他の団員の方に悟られないよう、できるだけ呆れたような口調でロキ様に注意した。
「リヴェリアの言うとおりだ、ロキ。派閥間での仲がいいとはいえ失礼な態度をとっていい理由にはならない」
リヴェリアさんとフィンさんが続けざまに注意され、流石にこりたのかロキ様はこっちを見て笑いながら「すまんな、ちょい酔いが回ってたようや」と謝ってくれた。
二人のお陰でどうやら、他の人達はさっきの話はいつものロキ様の戯言だと思ってくれたようだ。
そう思っていると、立っていたリヴェリアさんが僕の隣に空いた席に座り小声で僕に話しかけてきた。正直、エルフの方からの目が怖いからこういうのは遠慮してほしいんだけど……。
「すまんな……お前のそれはそんな生易しいものではないというのに」
「……構いませんよ。信じて話したのはこっちですし、話されたらこっちが見る目がなかっただけですから」
「思っていたより辛辣な言い方だな……。」

「すみません、少し輝夜さんの真似をしてみました。勿論、【ロキ・ファミリア】の方はそんなことをしないって信じてますよ？」

小声で謝罪するリヴェリアさんの言葉に冗談と皮肉を交えてそう返すと、「彼女の皮肉はそんな甘くないだろう」と言ってフフッと小さく笑みをこぼす。

僕のそれは師匠達ほど強力なものではない。その理由は定かではないが……。寧ろ、あれくらいが丁度いい。

「……それに、見たものが全てじゃないって知ってますから」

「……そうか」

僕が言った言葉にリヴェリアさんが静かに頷いて微笑んだ。それからしばらく、口を閉ざしているとアイズさんを押しのけてアマゾネスのえっと……確か、妹さんの方のティオナさんがフィンさんに質問を投げかけた。

「ねぇねぇ、次の遠征で【アストレア・ファミリア】と一緒に行くのってベルのその察知能力っていうのが役に立つから？」

「それもあるけど、ベルは十分前線で戦力になり得るからね」

「え？そんなに強いの、この子？」

「あぁ、彼は強いよ」

「ハッ！５年も寝てただけのやつに何ができる」

例の狼人の男性はフィンさんの言葉を鼻で笑ってお酒の入ったジョッキを傾ける。まぁ、普通はそういう反応だよね……。五年も寝てたってことは普通なら動いたときに成長した分の体の誤差とか体の筋肉量とか体力とかを普通の状態に戻すためのリハビリが必要だ。まぁ、僕はユーリがいたから少し筋肉が落ちただけでなんとかなったけど。

それに、別に五年間寝てただけってわけじゃないし。

でも見た目も相まって【ロキ・ファミリア】の人はあんまりいい反応ではなさそうだ。一応、こんなでも第二級冒険者なんだけどなぁ。

「ンー、まぁ、彼の戦っている姿を見たことがなければ当然の反応か。だったら、アイズ」

「なに、フィン？」

フィンさんは未だに僕の頭をモフモフといじっているアイズさんに視線を向けてなにか悪いことを考えているときの笑みでアイズさんに尋ねた。

「ひさしぶりにベルと戦ってみたくないかい？」

フィンさんがアイズさんに提案したのはアイズさんにとって、そして僕にとっても願ってもない申し出だった。

吹き荒れる暴風、斬り裂く雷鳴

酒場での紹介から一夜明け、ベルは今【ロキ・ファミリア】のホーム【黄昏の館】にある訓練場で自分の体をほぐすために準備運動をしていた。

昨日のフィンの提案によりベルの実力を証明するためにアイズとの模擬戦が行われることになった。【ロキ・ファミリア】側は殆どの団員が揃っているが、【アストレア・ファミリア】は巡回などの仕事や他にも仕事があるため偶然にも昨日のメンバーと同じだ。

ベルは訓練場の中心で対戦相手であるアイズの準備ができるのを待つ。その彼女も冒険者としての装備である鎧を纏い剣を腰に携える。

「レフィーヤ、これ持っててくれる？」

「あっ、はい！」

そう言って山吹色の髪のエルフの少女、神々より【千の妖精】の二つ名を与えられた魔力バカ妖精レフィーヤ・ウィリディスは憧れの先輩であるアイズからの預かりものであるボロボロの本を胸の前で抱きしめてアイズを見送る。

「ベル、準備できた、よ」

「わかりました・【我が手に来たれ――――】」

ベルはアイズの言葉を受けると詠唱とともに右手を前に突き出す。すると、彼の手に雷を纏った黄色いエンブレムの剣が、腰には三つのスロットのようなものがあるバックルが現れる。

【雷鳴剣黄雷】

「何あれ!?剣がいきなり出てきたけど!」

「ベルの魔法だだ、ああやって自身の剣を召喚するものらしい」

リヴェリアの説明に団員達はへぇ～と声を漏らす。

(懐かしいな、この感覚……。)

そんな中、ベルは5年ぶりに彼女と対峙したときの独特の感覚を噛みしめるように目を閉じる。

師匠達との修練とは違う、アリーゼ達ファミリアの仲間と剣を交えるときに感じるのと近い感情。自分でも上手く説明できない感情にはにかみながら、ベルはその紅眼の瞳を開く。

「アリーゼ」

「ええ、スイッチ入ったわね」

「全く、あいつは剣を握ると顔つきが変わるな」

「あっ、やばい……ちょっと濡れたかも」
「「え？」」
　彼が瞳を開くのと同時にベルが纏っていた空気が変わったのをアリーゼと輝夜、そしてリューはいち早く感じた。何か、アリーゼがやばいことを言ったような気がするがベルの耳には届いていない。……それで良かったかもしれない。
　今の彼には先程までの柔らかい空気はなくまんまるだった瞳は敵を捉えるために細められ、スキの無い佇まいで全身からプレッシャーを放っている。
　そして、そのプレッシャーは勿論【ロキ・ファミリア】の人間達も感じた。
「相変わらず、普段と雰囲気がまるで違うね」
「ああ、今のアイツは冒険者である前に一人の剣士ということなのだろう」
「5年も経ったせいか、昔より佇まいが様になっとるのう」
　その姿を知るものは5年前よりもさらに精錬された剣士としての姿に息を呑む。
「まるで昨日と別人ね」
「うん、なんか肌がピリピリするような気がする……。」
「あれが本当に昨日の人族なんでしょうか？」
「……。」
　そして、この場で初めて『剣士としての彼』を見たものは昨日の酒場で朗らかに話し

ていた人物と同一人物なのかと疑いたくなる思いだった。
ベル・クラネルは『普段の自分』と『剣士としての自分』との反復が酷く大きい少年だ。それはひとえにそれだけ彼が剣士としての誇りを持っていることにほかならない。
「始めましょうか。アイズさん」
「……うん！」
その言葉でベルは【雷鳴剣黄雷】を構え、アイズは愛剣【デスペレード】を構える。
「それでは双方、準備ができたようなので始めよう」
そう言っていい審判の役目を担っているフィンが前に出て、右手を上げる。そして、掛け声とともにその手を振り下ろす。
「それでは、はじめっ!!」
「「ッ!!」」
フィンの合図と同時に二人は一斉に地面を蹴って接近し、剣をぶつけ合う。
そこから始まるのは目まぐるしい攻防、アイズがベルのスキをついたかと思えばそれをかわしてベルが横薙ぎをはらい、それを受け止めたアイズが死角からの蹴りを見舞う。
それらの攻防と言う名の駆け引きが既に十を超える数行われている。
「嘘……。」

「アイズと互角……？」
「というか、速すぎない？」
その光景に驚愕するのは【ロキ・ファミリア】の面々。彼等はＬｖ．５であるアイズにＬｖ．４のベルに一矢報いる程度にしか考えていなかった。
さらに言えばベルは一ヶ月前まで昏睡状態、その分のブランクがある分、ベルの方が圧倒的に不利で戦いになると思っていたもののほうが少ないのが実情だ。
だが、二人の力は誰が見ても拮抗している。それは、彼らがざわめき出すのに十分すぎる理由だった。
しかし、その拮抗もやがて徐々に崩れていく。
「ふんっ！」
「くっ……！」
「なっ!?」
「アイズさんが……押され始めた!?」
拮抗していた戦いはベルの剣がアイズの剣を押し返し始めたのだ。これにさらにどよめきが起きる。本来、レベルとは荒くれ者の冒険者の間に存在する絶対的な力の値、レベルが高い者に低いものは絶対に勝てないというのが摂理と言ってもいい。
だが、どうか？目の前の少年は、オラリオが誇る第一級冒険者にしてＬｖ．５の【剣

姫】を相手に互角以上の戦いを繰り広げているのだ。
「どういうこと、これ？ホントにあの子Ｌｖ．４なの？」
「……ベルの剣は重いのよ」
　疑問をこぼしたティオナに答えたのはベルの団長であるアリーゼだった。そして、その言葉を輝夜が次いで説明する。
「ベルの剣は重い。あいつの剣にはあいつが今まで培ってきたもの、背負ってきたものが全て乗っているからな」
「そっ、そんな精神論でレベルの差が埋まるんですかッ!?」
「精神論でもなんでもありませんよ、同胞の者」
「え？【疾風】さん？」
「事実彼の剣はそれを成している、それは確固たる事実だ」
（それにあの子が背負っているものはここにいるものが思っている以上に……。）
「ああ、僕も彼の剣を何度か受けたことがあるが……腕が痺れるほどの衝撃だったのを覚えているよ」
「そこまでなんですか、団長!?」
　フィンの言葉にティオネを始めとする幹部陣は驚愕する、まさか、団長であるフィンにまで一矢報いていたとは、と。

「だが、それはアイズも同じだ」
「くっ！」
「ぬぅ！」
　フィンが言うが早いか今度はアイズが攻撃に出た。先程のように容易く弾き返されることはなく確かにベルの雷鳴剣と互角に斬り結んでいる。
（あの頃よりもずっと重くて速いっ……！きっと僕が知らない五年え沢山の経験をしてきたんだろう。これが、今の【剣姫】、アイズ・ヴァレンシュタイン……！）
（やっぱり、ベルの剣は重い……！あの頃よりもさらに……！やっぱり、夢の中でも修行を続けてたんだ……！）
　二人は斬り結びながら互いに互いのことを心の底から称賛する。
（（だけど!!））
　互いの剣に一層強い力が込められ、反発したタイミングで距離を取る。
「僕は」「私は」
「「絶対に負けない!!」」
　もはや、二人はこれが模擬戦であることも周りのざわめきすらも忘れて目の前の剣士と五年間の空白を剣での対話により埋めていく。
「【目覚めよ（テンペスト）】ーーーー！」

そして、解き放たれるのはアイズの魔法。風を全身に、剣に纏わせる付与魔法。これこそが、アイズの本来の戦闘形態。

ここから放たれる剣戟は文字通り神速のものとなるだろう。故にこそ、ベルもまた真の力を発揮する。

「僕の全身全霊を持って貴方を倒します！」

ベルは雷鳴剣を腰のベルトに納刀すると、掌に乗るサイズの小さなを本を取り出す。金色のその本の表紙には金色のランプが描かれており、中からなにかの瞳が覗いていた。

【ランプドアランジーナ！】

【とある異国の地に古から伝わる不思議な力を持つランプがあった……】

ベルが表紙である【ガードバインディング】を展開すると、その物語の概要【ライドスペル】が流れる。

「なに、あの本？」

「やはり、あれを使うんだね」

「団長は知っているんですか？」

「まぁ、見てなよ。それに詳しく知りたいなら、僕からより本人から聞くといい。彼なら教えてくれるさ」

剣を納刀したベルに疑問符が湧くギャラリーだったが、フィンの一言で静まり返る。
そして、それを無視したベルはその本【ランプドアランジーナワンダーライドブック】をベルトの一番左にある窪み【レフトシェルフ】に装填する。
何処か刺々しい男がベルトから鳴ると、空から彼の背後に巨大なライドブックが飛来する。
「な、なんだあれ!?」
「さっきの本がでかくなって降ってきやがった!」
さらにざわめきが多くなるギャラリーを無視してベルは納刀した【雷鳴剣黄雷】を引き抜く。
【黄雷抜刀!】
剣が引き抜かれたと同時に背後のワンダーライドブックも勢いよく開き金色の装甲を纏った剣士の腕が描かれたページが展開されると、本の中からランプの魔神が飛び出してきた。
ベルは引き抜いた剣顔の横に構えて手首で一回回すと顔の前に剣を構える。
「変身!」
【ランプドアランジーナ!】
【黄雷一冊!ランプの精と雷鳴剣黄雷が交わるとき稲妻の剣が光り輝く!】

腰を低くして雷鳴剣を下から上に振り上げると、ランプの魔神がベルを中心に雷とともに高速で旋回しそれが弾け飛ぶとそこには白と金色に近い黄色の装甲を左半身に纏った仮面の剣士が経っていた。
「変身したッ!?」
「凄い！カッコいい!!」
各々がそれぞれの感想を述べるなか、ロキ、フィン、リヴェリア、ガレス、そして、【アストレア・ファミリア】の団員は懐かしそうに目を細めた。
「久しぶりに見るね、あの姿は」
「……アイズと戦うときはいつもこの姿だったな」
「懐かしいのう……あの二人が戦うたびに訓練場に嵐が来たかと思うたわい」
「当時のウチからしたら悪夢以外の何者でもなかったけどな……だけど、こうしてみるとアレもいい思い出と思えるから不思議や」
「ベルが変身するのホントに久しぶりに見たわね」
「そうですね、アストレア様。あの姿を見ると、本当に帰ってきてくれたんだって思います」
「あらあらしくないことをおっしゃいますね、団長様」
「輝夜こそ、普段しない眼をしているぞ」

「……黙っていろ、ムッツリ妖精め」
「なっ……!?」
何やら関係ない言葉が聞こえた気がするがそこはおいておいて……アイズとベル、否、雷の剣士【仮面ライダーエスパーダ】は互いに少しずつ距離を詰めていく。
そして、その距離が縮まると二人の姿がぶれ二人の剣士の剣がぶつかり合った。
魔法の余波で雷と風が辺り一面に飛び交う。それらは、嵐のように周りの人間ににお構い無しで飛来する。
「うおっ！」
「危ねえ！」
「あばばばばば!!」
「「ラウルに飛来したぁ!?」」
「あばばばばば!!なぜか懐かしいこの感覚ううううううう!!」
ラウルに飛来した雷によって骨が見える姿に、観覧していた者達は慌てて安全な距離まで避難する。
「あの戦闘馬鹿二人は加減を知らんのか!?」
「この感じも相変わらずだねっ」
リヴェリアは油断して吹き飛ばされた団員を尻目に怒鳴り声をあげ、フィンは何処か

諦めた様子で二人を見る。
　二人の戦いは激しさを増すばかりである。二人の姿はもはや、しっかりと確認することはできず剣先はもはや速すぎて残像しか見えない。
「【吹き荒れよ（テンペスト）】!!」
「くっ……!ぐぅぅぅ!!」
　アイズはデスペレートで雷鳴剣を絡めると風を自発的に暴発させてゼロ距離から暴風を拭き散らす。エスパーダはそれによって吹き飛ばされて地面を転がる。
「僕も出し惜しみしている場合じゃなさそうですね……!」
【ニードルヘッジホッグ!】
【トライケルベロス!】
【この弱肉強食の大自然で幾千もの針を纏い生き抜く獣がいる……。】
【かつて冥界の入り口に三つの頭を持つ恐ろしき番犬がいた……。】
　雷鳴剣を再びベルトに納刀すると新たなライドブックをベルトの真ん中と右に差し込み雷鳴剣を抜刀する。
【黄雷抜刀!】
　再び背後にライドブックが現れ、それぞれ別別のエスパーダの姿が描かれておりそれらが重なり合い全身を金色の装甲で覆われた姿が完成する。

【ランプの魔神が真の力を発揮する！ゴールデンアランジーナ！】
　無数の棘と三つ首の番犬が飛び出すと、それらの力がエスパーダの新たな装甲を形成していく。
【黄雷三冊！稲妻の剣が光り輝き雷鳴が轟く！】
「また姿が変わった!?」
「あの馬鹿……！あの体でワンダーコンボを使うとは……！」
　新たな姿へと変わったエスパーダに驚きの声が上がるが、それよりも輝夜がその姿になったことに表情を歪める。
　アイズの暴風も、ベルの同じ色の本三冊による力『ワンダーコンボ』も負荷が大きく長くは続かない力だ。
　だからこそ、この勝負は長くは続かない。
「アイズさん、あの構えは!?」
「決着をつける気だな」
　アイズは姿勢を低くし、暴風を纏って必殺の刺突の構えを取る。
（ベルの目なら、あの刺突をギリギリで回避して勝つことは容易いだろう。だけど、彼はそうはしないんだろうね）
　フィンの考え通りエスパーダは回避の素振りを見せず三度、ベルトに雷鳴剣を納刀し

グリップのトリガーを押す。

【必殺読破！】

【黄雷抜刀！】

引き抜かれた雷鳴剣は凄まじい電撃を帯びていた。正しく、それを正面から突き抜けるつもりの構えだ。

そして、二人の剣士は互いに地を踏みして、互いに今出せる最強の技を放つ！

「【リル・ラファーガ】!!」

【ケルベロス！ヘッジホッグ！アランジーナ！三冊斬り！】

「【トルエノ・デル・ソル】!!」

【サ、サ、サ、サンダー！】

二色の閃光が駆け出し、それがぶつかりあった。

己の正義

――雷と風の刺突が交差すると、あたりに衝撃に待った砂埃で出来た粉塵が僕達の視界を塞いでいた。

そして、粉塵が晴れると――アイズさんの首元に剣を突きつけた僕の姿が顕になった。

「アイズさんッ!?」

山吹色の髪の妖精さん、レフィーヤさんが叫ぶのと同時に空中からヒュンヒュンという音ともに何かが地面に刺さった。それはアイズさんの武器であるデスペレード、僕の雷鳴剣の刺突で空中に弾き飛ばされていたものが地面に落ちたのだ。

僕は勝負が決まったことを確認し、雷鳴剣をソードライバーに納めワンダーライドブックを閉じた。すると、僕が変身していた、エスパーダの姿がパラパラと舞い散り元の姿に戻る。

「僕の勝ちです……アイズさん」

「うん……私の、負け……。」

僕が自身の勝利を告げると、アイズさんは悔しさのような感情がこもってないはにか

んだ笑みをこぼしてみせた。
「やっぱり、ベルは強い……。」
「アイズさんもすごく強かったです」
お互いに手を差し出して、互いを称賛し合うように握手をする。最初は僕が勝つといつも不貞腐れて手を取ってくれなかったけど、だけど、何度か模擬戦をしてからこうして互いを称賛するのが僕達の間での決まりになっていた。
アイズさんがデスペレードを取りに行く姿を見ていると、僕は急に足元がふらつき、地面に倒れそうになる。あっ、やばい。ワンダーコンボの負担が今になってどっと来た。
「あっ……。」
僕はとっさに足に力を入れようとするがそれが間に合わず、地面に激突……する前にこちらへ走ってきていたリューさんに抱きとめられた。
「大丈夫ですか、ベル?」
「すみません、リューさん……。」
リューさんは僕の腕を首の後に持っていき、僕の肩を支えて立たせてくれる。
エルフの人って、多種族の人との接触を極端に嫌うって聞いてたけどリューさんはそんなことがないんだよな。アリーゼさんとかアストレア様が初めて見た時、凄い顔して

たけど。
「ベル、大丈夫なの？」
「あらら、久しぶりの戦いで張り切っちゃったの？」
「馬鹿が。あの体でワンダーコンボなど使えば、そうなるに決まっているだろうが」
「かうやひゃん、いひゃい……。」
　アストレア様とアリーゼさんが心配そうに僕の顔を見てくれるけど、輝夜さんには僕の頬をむに～っと引っ張ってお説教をされた。
　そこへ、剣を回収したアイズさんとヒュリテ姉妹、レフィーヤさんがやってくる。特にティオナさんは興奮した様子で僕に尋ねてくる。
「すごかったね、ベル！さっきの剣、後あの本なんなの？」
「あぁ、これのことですか？」
　僕はランプドアランジーナのワンダーライドブックを取り出して見せると、そうそうとうなずく。話しちゃっていいの？と、アリーゼさんとアストレア様に視線を向けるけど別に構わないって顔をしている。
「これはワンダーライドブックって言って、様々な力が秘められた本でこっちの【雷鳴剣黄雷】は聖剣と呼ばれる剣です」
「聖剣？魔剣じゃないんですか？」

「違いますよ、雷を放っても砕けてないでしょ？」
　この世界の魔剣は使用回数を超えると砕け散ってしまう使い捨てのものだ。だけど、聖剣が砕けることはありえない。人の手で作られたものもあるとはいえワンダーワールドの力を内包した剣だからだ。
「どっちも、この世界には本来ないものです」
「え？どういうこと？」
「僕のスキルはこことは別の世界からこの本と聖剣を召喚するっていうスキルなんです」
「「別の世界？」」
「すみません、これ以上はちょっと……。」
　そんなものがあるのだろうかと半信半疑の表情だが、これ以上の説明をするのは危険だ。これ以上話すとなると、どうやっても【全知全能の書】や【黙次録】に触れなきゃいけなくなるから。
「仕組みとしてはライドブックに込められた力を聖剣で開放することで変身して戦う、それが僕の戦い方なんです」
「ねぇねぇ、それって私にもできる？」
「試してみますか？」

「え？いいの!?」
　僕は雷鳴剣が収まった腰の【聖剣ソードライバー】とワンダーライドブックを興奮した様子のティオナさんに差し出す。ティオナさんはワクワクした様子で僕からそれを受け取ると僕さっきしたのを真似て腰のスロットにワンダーライドブックを装填して、剣を引き抜こうとする。
　だが、
「うわっ！」
　剣を握った瞬間、迸った電流にティオナさんは驚いて剣を離す。そして、その衝撃で腰から落ちてバックルから剣の状態になった雷鳴剣とワンダーライドブックが僕の手の中に独りでに戻ってくる。
「まぁ、僕以外が使うとこうなるわけです。どうやら、聖剣は僕にしか使えないようで」
「ええ～！」
「だからといって、僕が聖剣を使いこなせているかと言われればそうでもありませんしね」
「そうなの？」
「はい、今の僕じゃ精々五・六割しか力を引き出せませんから」
「あれで、五割って……。」

「謙遜、ってわけでもなさそうね……。」
　僕のこの言葉は謙遜でもなんでもない。師匠達の戦いを見たあとで自分のほうが上手く使えているなんて口が裂けても言えない。だからこそ、鍛錬を欠かすわけには行かないのである。
「聖剣は持ち主を選ぶことはあっても、持ち主に縋ることだけはない。その資格がないと判断されれば剣の側から持ち主を見限る。だから、剣に見合うように己を鍛える必要があるんです」
「まるで、生きてるみたいね。その剣」
　ティオネさんの言うことはある意味で的を射ていると思う。実際、飛羽真師匠は火炎剣に向こうから選ばれたし、大秦寺師匠は剣の声が聞こえると言っていた。なにより、まさしくそれを体現した存在が僕らの仲間にいるわけだし。
「さっき言った、ワンダーコンボというのは相性のいい聖剣で三冊の本を同時に使った状態のことです。互いの本の力を最大限発揮できますけど、その代わりに剣士の気力と体力をかなり消費する。今の僕じゃ、一日に一回使うのがやっとです」
「へぇ、だからそんなに体の負担が大きいのね」
「昔はもう少し使えたんですけど、やっぱり体力が落ちてるなぁ……。」
「悲観することはない、万全の状態じゃないのにＬｖ．５の冒険者に勝てるのだから少

しずつ取り戻していけばいい」
「そうそう、あれだけ戦えれば上出来よ」
「そのたびに倒れられたら溜まったものではないがな」
「うっ」
　僕ががっくりと肩を落としたけど、僕の肩を支えてくれるリューさんとアリーゼが慰めてくれるけど輝夜さんが相変わらず意地悪なことを言ってくるのでぐぅの音も出なくなる。
「ベル、大丈夫か？」
「あっ、リヴェリアさん……はい、ちょっと体に力が入らないだけです」
「改めて見せてもらったよ、剣士としての君の力を。腕は落ちていない、いや、昔よりも強くなっていたね」
「まっ、アイズたんが負けたのはムカつくけどな」
「これロキ、真剣勝負に茶々を入れるでない」
　僕の姿を称賛してくれるフィンさんと、アイズさんが負けて若干むくれているロキ様をたしなめるガレスさん。
「ねぇねぇ、ベル！今度は私と戦ってよ」
「バカティオナ、アンタ話聞いてなかったの？どうみても、今日はもう戦えないでしょ。

というか、アンタの武器、この間の遠征で使えなくなって修理でしょう」
「えぇ～～!!」
「あはは……。」
　ティオナさんが興奮した様子で模擬戦を申し込むけど、見ての通り動けない僕を指差してティオネさんが注意した。なんとも言えない笑みがこぼれた。
「それじゃあ、ロキ。私達は帰るわ。ベルを早く休ませたいしね」
「大丈夫か？なんなら、うちで少し休むくらいなら構わんけど？」
「別に歩けないほどじゃないから大丈夫ですよ」
「そか。」
　ロキ様がそう納得するとアリーゼさんとフィンさんが団長同士でなにやら話し合っている。多分、次の遠征のことについて話しているのだろう。僕達は邪魔しないように黙っていると。
「そういや、ベル」
「なんですか、ロキ様？」
　ロキ様がまた、僕に問いかけてきた。
「ジブンの正義は今も変わらんのか？」
　――その質問に再び空気が変わったのを感じた。

　そういえば、五年前に一度ロキ様とあのにっくき黒い神様に聞かれたっけ……。僕はさして気にすることもなく笑顔でその質問に答えた。
「変わりませんよ、僕の『正義』は。絶対に」
「ねぇ、ロキ。どういう意味、それ？」
「あぁ、ティオナ達は知らんかったか。はっきりいって、ウチは最初はアストレアが好かんかった。すべての人間が公平になんてなるはずなんてないのに、正義なんちゅう無意味なもんを掲げるこいつがな」
　流石に主神を貶されてアリーゼさん達が視線を鋭くするけど、僕はリューさんの腕から抜け出しそれを腕で制する。
「ロキ、言葉がすぎるぞ」
「ええやろ、昔のことやし。その時コイツに聞いてな。そしたら、否が応でも認めなあかんくなった。ウチらの存在意義に関わるからな。折角や、もう一回聞かせてくれんか？ジブンの正義」
　そういって、目を見開いて僕に尋ねるロキ様。はっきりいって、こんなに人がいる中で話すのって結構恥ずかしい内容だから嫌なんだけどなぁ。でも断れる雰囲気ってわけでもなさそうだし。
　僕は意を決して、その問いに答えた。

「何も変わりませんよ、『世界を守ること』です」
　僕がそう答えると、皆が「はぁ？」という顔になる。それはもう、「何いってんだこいつ」みたいな眼してた。だから嫌なんだよ、初対面同然の人にこういう事言うの。
「それはまた……大それた……。」
「だけど、現実味がないわね」
「そうですかね、意外と簡単ですよ」
　なかなかに辛辣なことをいうヒュリテ姉妹の二人。だけど、僕は自分の考えを変えずに強い口調で話し始める。
「じゃあ、世界って何でできてると思います」
「なにって、それは……。大地とか、海とか、自然とか……ですか。」
　今度はレフィーヤさんが答えるけど、僕が求めるのはそういった根本的なものではない。
「僕は人だと思っています」
「「人？」」
「人は生きていく中で様々な苦難にぶつかります。それを乗り越えようとする足掻きがその人の物語となってそれが『歴史』となっていきそれが今の世界を造っています」
　僕の言葉に皆さんはただ耳を傾ける。

　かつて、師匠達が戦った【不死の剣士】は争いは決してなくならいといった。世界は悪と災いで出来ているとも。そんななかにきっと正義などないと思ったことだろう。だけど、師匠達はそれを乗り越えた。

「以前ロキ様は正義は無意味だと言いました。確かに、いつの時代も争いが耐えることはありません、だけど、それだけではないはずだ。その争いの中で人は多くのものを生み出してきた。それはきっと、人を救いたいという気持ち、人の善意や思いやりから生まれたものです。だから、たしかにそこに正義はある、そして、その正義は今も歴史となって確かに継承されている」

　僕はこのことを本に、剣に、そして師匠達から教わった。それはきっと、世界を超えても変わらない人類に共通する力なのだと思う。

　それらが無意味なら、神々が神の力を放棄してまで外界に来た意味もまた無意味になるはずだ。

「だから、僕の言う正義っていうのは……いずれ、歴史になる人々の物語を守り未来につなげること、ですかね？」

「――そうか、まぁ、そういうことにしとくわ。まっ、次会うまで達者にしとけ」

「おい、ロキ。全く、自分で聞いておいて、すまんなベル」

「いえ、それでは僕達は帰ります」

「ああ、気をつけて」
「遠征についてはおいおい、使いを出すよ」
「わかったわ」
　僕が答え終わると、ロキ様はどこか満足したように頷いて踵を返してホームの建物の方に戻っていった。リヴェリアさんに謝罪を言われたがロキ様が満足してくれた答えかどうかは微妙なのでなんともいえない。最後に団長同士で二言、三言話すと今度こそ僕達は帰路についた。

ステータス

「それじゃあ、ベル背中を向けて寝てね」
「はい」
【アストレア・ファミリア】のホーム、【星屑の庭】の主神室に設けられた大きなベッドにアストレア様に服を脱いで背中を向けてうつ伏せで寝る。
――あのあと、ホームに帰ってきた僕はそれぞれの仕事から帰ってきた皆から結果はどうだったという質問攻めを受け、僕が勝ったというと「すごいじゃない！」「あの【剣姫】相手に勝つなんてね」「もうベル君にＬｖってあんまり意味ないんじゃない」と賞賛の言葉を受けた。
何故か、僕よりもアリーゼさんが「当然よ、私のベルだもの！ふふん！」と胸を張っていたのは謎だったけど。
そのあと、食事をしてお風呂に入ってアストレア様にステータスの更新をお願いして今こうしているというわけだ。僕が待っていると、つぷりという針を指にさす音とともに僕の背中にちょっと冷たいような生暖かいような液体が垂れてくる。
「この間みたいに可愛い声は出してくれないのね？」

「いじわるいわないでください……。」
「うふふ、ごめんなさいね？」
僕が目覚めて久しぶりにダンジョンに潜ったあとに五年ぶりにステータスを更新したときにアストレア様の血が僕の背中にたれた感覚に、思わず「ひうっ」という情けない悲鳴を上げてしまったことを思い出し赤面する。
アストレア様はそれを使って僕の背中の紋章に刻まれたステイタスを更新していく。そして、しばらくして用意してあった用紙にそれを写し終える。
「はい、もういいわよ」
アストレア様の言葉に僕は起き上がり、アストレア様から僕のステイタスの写しを受け取る。

ベル・クラネル
Ｌｖ．４
力：ＳＳ　１０２０　↓　ＳＳＳ　１２００
耐久：ＳＳＳ　１９００　↓　ＳＳＳ　２０００
器用：ＳＳＳ　１３００　↓　ＳＳＳ　１５５０
俊敏：ＳＳＳ　１３００　↓　ＳＳＳ　１４００

魔力：ＳＳＳ　１５００　→　ＳＳＳ　１８００
幸運：Ｃ
全知全能：Ｉ

《スキル》
□剣士の修練場（リベラシオン）
・意識が未覚醒のときに任意で発動。
・自身の意識を異世界の剣士の魂と接続する。
・意識が覚醒時、リベラシオンでの鍛錬が肉体に反映される。
□正義剣士（カメンライダー）
・早熟する。
・己の正義を貫く限り効果向上。
・剣士たちへの憧景が続く限り持続する。
・【世界の敵】と対峙した際全てのステータス上昇。

《魔法》
全知全能の断片（オムニフォース）
・詠唱式【我が手に来たれ――――】
・聖剣を召喚、及び誘引できる。

・【火炎剣烈火】
・【水勢剣流水】
・【雷鳴剣黄雷】
・【土豪剣激土】
・【風双剣翠風】
・【音銃剣錫音】
・【闇黒剣月闇】
・【光剛剣最光】
・【煙叡剣狼煙】
・【時国剣界時】

■無詠唱でワンダーライドブックを召喚できる。

■追加詠唱

【覚悟を超えた先に希望はある】

・聖剣の力を【正義剣士】に呼応して上昇させる。

「また随分と上がったわね、やっぱり久しぶりにアイズちゃんと全力で戦ったのが良かったのかしら？」

アストレア様の言葉に心のなかで同意する。確かに、アイズさんとの剣での対話は他の冒険とは違うものがある。あの最後の戦いで互いに肩を並べて戦ったというのが一番の理由かな。

「それにしてもベル、ホントにまだランクアップしなくていいの？」

「はい。ランクアップするのは体が完全にもとに戻ったらって決めてますから」

「相変わらず変なところでストイックねぇ……。」

僕の言葉に困ったように笑うアストレア様。でも、これくらいできるようにならないと意味がない。師匠達は恩恵なんてない世界でメギドと戦って世界を救ったんだから。せめてそれくらいは強くなってからじゃないと。

僕のスキル【剣士の修練場】はかつてここと違う世界を救った剣士たちの魂と夢の中で意識をつなげるスキルだ。だけど、これはスキルが発言する前から何故か使えて、恩恵をおもらって聖剣とライドブックを召喚できるようになったときはすごく嬉しかったのを覚えてる。

嬉しさのあまり、アストレア様に抱きついたくらいだ。

ただ、すぐ使えるようになったかと言われればそうではなく。ある女神様の策略でＬｖ．１のときにミノタウロスと戦うことになったときにようやく使えるようになった。ついでにランクアップもした。

【正義剣士】もその修業やその人達の物語を見てきたから生まれたスキルだと思う。最初は【仮面剣士】だったけど、【アストレア・ファミリア】として自分の正義を見つけてからは正義って文字が入って少し変わった。

そろそろ、部屋に戻ろうとベットから立ち上がろうとしたとき後ろからアストレア様に抱きとめられてしまった。

「あ、アストレア様!?」

「ふふふ、ベル。今日は私と一緒に寝ましょ?」

「え?えぇ!?」

「だって、アリーゼに輝夜、リューとも目覚めてから一緒に寝たんでしょ?たまには私とも寝てくれないと女神でも拗ねちゃうわよ?」

そういって僕にウィンクをするアストレア様。あっ、かわいい……。アストレア様ってこういうお茶目な所あるんだよね。

「じゃなくてッ!そ、それって色々まずいんじゃ?」

「私が良いって言ったから良いの、ほらこっち向いて」

アストレア様にくるりと回され向かい合うようになると、その胸元に抱きしめられて頭を撫でられる。僕は下手に抵抗するとアストレア様を傷つけてしまうからそのまま無抵抗で抱きしめられる。

「ベルは昔からこうされるとすぐに寝ちゃうのよね？」
「だって、気持ちいいから……。」
「そう」
僕が顔を赤くして俯くとより優しい手付きで僕の頭を撫でるアストレア様。
そこからしばらく黙って撫でられているとほんとに段々と瞼が重くなっていきいつの間にか僕の意識は途切れていった……。

「アストレア様、ベルの更新終わりましたか？」
ベルが眠ってしまい、アストレアは抱き合う形から膝枕に体制を変えてベルの頭をなでていると扉のドアがノックされてドアの向こうからアリーゼの声が聞こえてきた。アストレアはベルが起きない程度の声量で「入っていいわよ」とドアの向こうのアリーゼに告げる。
「あれ？ベル、寝ちゃいました？」
「ええ、今日は一緒に寝るつもりだったし別にいいんだけどね」
「えっ!?ずるいですよ、アストレア様ッ!?」
「何言ってるのよ、かわりばんこでベルを部屋に連れて行ってるくせに」

「うう……。」

アリーゼはアストレアの正論に何も言えず、おとなしく諦めてアストレアの隣に座りベルの頭をなでているとベルのステイタスの写しが目に入った。

「お〜！やっぱり結構上りますねぇ。ランクアップは？」

「まだしないそうよ。もっと強くなって、師匠達みたいに全てを救える人になりたいからって」

「ベルの師匠かぁ、どんな人なんでしょうかね？」

「さぁ？ただ、ユーリを見た限りだと悪い人ではないでしょうね」

「確かにそうですね……空気読まないけど」

「そうね、空気読まないけど」

ベルしか会うことの出来ない彼の師匠達のことを考える二人。きっとベルがここまで真っ直ぐでいられるのは彼らのお陰なのだろう。

「本当に立派になったわね……。」

「そうですね」

アストレアの言葉にアリーゼは頷く。そして、同時に六年前あの二人と最悪な形で再会したときのベルのことを思い出す。

『僕を……家族を置いて出ていって、こんなところでなにしてんだよッ!?』
『……。』
『なんで黙ってるんだよ……!?答えろよッ!!』
『今すぐ村に帰れ、お前を殺したいとは思わない』
『なんでだよっ!?なんでなんだよぉ!?』
　傷だらけで地面に倒れ伏して泣きながら拳で地面を叩くベルの姿をあの二人は感情を押し殺したように無表情で背を向けてその場を去った。
　あのときのベルにかける言葉をアリーゼ達は持ち合わせていなかった。
『アリーゼさん、正義って……何なんですか?』
『僕は正義が正しいものだって……沢山の人を助けられることだと思って……そのために強くなりたいって思ってた。そうすれば、いつかお義母さんたちを救えるくらい強くなれるって思ってたから……。』
『だが、今あの二人が行おうとしていることは悪以外の何物でもない。それを斬るのが正義の眷属であり、剣士であるお前の役目だ』
『そんなことはわかってるよッ!だけど、だけどッ!僕は……僕は家族と戦うために強くなりたかったわけじゃない!!』

『僕はアストレア様の眷属である前に一人の人間なんだよ……!』

迷走し、ホームを飛び出した小さな背中。あのときのベルに余裕などなかっただろう。幼いながらに特異な力を持ち都市の守備に一役を担っていたベル。いつの間にあの子供を一人前だと思ってしまったのだろうか?あのときのベルはまだ齢六歳だったというのに。

ただ、極東のことわざに男子三日会わざれば刮目して見よというものがあるが、帰ってきたベルは迷いを断ち切っていた。アリーゼ達が聞いたところ『魔王様が背中を押してくれた』と言っていたが意味が全くわからなかった。

『例え、それが偽善と呼ばれようとも僕は僕の正義を貫く!』

『僕にもう迷いはない!』

『物語の結末は僕が決める!!』

師匠達の言葉を借りて先頭を走り、三体の竜の力をその身に纏い炎と光の剣を持ち戦う姿。リューの友人である英雄譚がすきな少女は『炎と雷の剣だったら完璧だったんだけどなぁ』と残念がっていたが、取り込まれていた神を引き離すためには光の剣の力が必要だったのでしかたないが。

それをなしにしてもその姿は確かにあの二人が求めたもの【英雄】の姿だった。灯台下暗しとはよく言ったものだ。彼らが求めていたものはすぐ傍にあったのだから。

それからはいくつかのファミリアと協力し二人を死んだことにして都市の外に逃がすなど事後処理が忙しかったが、そんな中でもこの子はよく頑張ってくれた。
そんなこの子に日頃からのご褒美として久しぶりの里帰りの許可をして、帰ってくるまで少しでも仕事を減らそうとして焦ったのがあの悲劇の始まりだった。
『僕とともに闇に消えろぉ!!』
闇の剣をつきたて、自分もろとも闇の中に引きずり込もうとする姿。なんとか助けることは出来たが、その力の反動でベルは深い眠りについてしまった。
それから毎日のように見舞いに行って、二度とあんな悲劇が起きないように都市の秩序を守るために尽力した。しかし、五年の月日が流れ、心のどこかでもう目覚めないのかと思っていたときだった。
『お、ねぇ……ちゃ、ん?』
かすれた声だった……。だけど、聞き間違えるはずのなかった声だった。
病室の花瓶の花を入れ替えていたアリーゼはとっさに振り返りその勢いで花瓶を落として割ってしまったが、そんなことよりももっと早くその瞳が開いていることを確認したかった。
そして、その目は確かに開いて自分のことを見ていた。
『お、は……よう』

あの言葉を聞いたときの喜びは多分、今まで生きてきた中で一番の喜びだったことだろう。

「私、今でも怖い時があるんです。ベルがこうして眠っている姿を見ると、また目覚めなくなってしまうんじゃないかって……。」
「そうね……私もよ」
「だから、今は毎日が楽しいんです。いつも、朝起きたときにこの子の声が聞こえるのが」
眠っているベルが起きないように優しい手付きでベルを撫でるアリーゼ。その横顔はいつもの大胆さが抜けて、どこかの絵画のように笑顔の後ろに僅かな哀愁を帯びていた。
「そろそろ寝ましょうか?アリーゼ、今日は貴女もここで寝る?」
「いいんですか!?」
女神の提案に団長は喜んで承諾し、そのまま女神のベットでベルを中心に川の字で眠ることとなった。

「……どういう状況？」

目が覚めると二人の美女に抱きまくらにされていたベルは第一声にこう呟き、そのまま理解ができず修行しようと夢の中の修練場に逃げた。

早朝訓練

早朝、【アストレア・ファミリア】の本拠【星屑の庭】で僕は一人の剣士と相対していた。

「はっ！」

斜めから回転しながら振り落とされる二本の翠の剣からなる連続の斬撃を僕の相手の剣士、金髪エルフのお姉さん【疾風】の二つ名を持つリューさんが木刀でそれを受け止める。

――何故か、今朝起きるとアストレア様だけでなくアリーゼさんにまで抱き枕にされていた僕は二度寝して【剣士の修練場】で修行していたが、ようやく二人が起きたことで動けるようになり、毎朝の日課であるアリーゼさん達との早朝特訓を始めた。

今日の相手はリューさんだ。流石に変身せずに普通の組手のようなものだ。

「ッ！フッ！」

リューさんは文字通り風のように僕の攻撃を躱し、受け流しふとしたすきに一撃を見舞おうと自分の身の丈ほどの木刀を振るってくる。それをかわそうと身をかがめて翠の双剣、二対一体の風の聖剣【風双剣翠風】を左右に交差させて振り抜く。

――【風双剣翠風】の最たるはそのスピードと軽やかさ、そして、二刀流による変幻自在の攻撃。だからこそ、似た戦闘スタイルのリューさんとの戦いが自分の弱点や新しい戦い方を考える上で一番経験値を積むことができる。

しかし、僕の足元からの剣戟を後ろに飛んで回避したリューさんはそのリーチの長い木刀の突きが左手に直撃し、双剣の片方【翠風・裏】が僕の手元から離れて地面に転がる。それを拾うスキもなく次の攻撃が迫りなんとか、【翠風・表】でさばこうとするがそれよりも早く僕の眼前に木刀が突きつけられた。

「……っ、参りました」

若干の悔しさをにじませながら敗北を認めると、リューさんは訝しげな表情で木刀をおろした。

「どうかしましたか、ベル？今日はいつもより動きにキレがありませんでしたが」

「そんなことは……。」

「あるわ馬鹿者」

「輝夜さん？」

リューさんの言葉を否定しようとする前にいつのまにか朝食の準備をしているはずの輝夜さんとアリーゼさんが庭に出てきていた。アリーゼさんは落ちていた僕の【翠風・裏】を拾うと僕に差し出しながら話す。

「輝夜の言うとおりよ、ベル。明らかに動きが鈍っているわ」
「大方、昨日のワンダーコンボの負担が残っているのだろう。全く、ただの模擬戦なのにあんなに張り切るからだ」
「うっ……。」
輝夜さんにズバリと言い当てられ何も言えなくなる。確かに昨日のワンダーコンボの負担が残っていることは認める。師匠達みたいに修行を積んだから普通ならああはならないんだけど、やっぱり五年分のブランクがあるせいか体がキツイ。
アリーゼさんと輝夜さん、リューさんがなにか目配せをして頷くと輝夜さんが一瞬悪い顔をして僕に告げる。
「ベル、お前は今日ダンジョン探索は休め」
「ええ～！」
「ええ～！ではないは戯け。これ以上体を酷使して遠征に間に合わなくなったら元も子もないだろう。それでいいな、団長様？」
「そうね、それが良いでしょ」
そんなこんなで僕の意見が取り入れられることなく、僕の一日ダンジョン探索禁止令が言い渡されてしまった。なんてことだ……。
僕が肩を落として、二本の風双剣を一本に合わせて腰裏のホルダーに納めるとホル

ダーごと風双剣を消して戻す。
「さ、朝食ができていますので、早く行きましょう」
　輝夜さんの言葉に若干肩を落としながらついていく。しかし、その次にアリーゼさんが放った言葉に僕は目を丸くすることになる。
「さっ、早くご飯食べて出かける準備するわよ」
「え？」
　いきなりの言葉に僕は理解が追いつかなった。出かける？はて、どこに？ダンジョン探索は出来ないし、あっ、女の人同士でどこかにお買い物にでも行くのかな？
「何を自分は関係ないみたいな顔をしているんだ。お前も行くのだ」
「えっ、なんで？」
　輝夜さんが僕の表情を読み取って突っ込んでくる。それでさらに僕の頭の上に疑問符が浮かぶ。
「ベルって昔から休みの日はいつも本を読むか執筆で一日使っちゃうじゃない」
「流石にそれでは不健康だ、リハビリも兼ねて最低限動かなければいけない」
「だから、私達美少女三人でベルを買い物に連れ出してあげようってわけよ！ふふん！」

この五年でさらにご立派になったお胸を張ってそう宣言するアリーゼさん。さっきの目配せにはそんな意味が!?

「それに、五年も経ってるんだ。いくら同世代より背が低いからって着れる服も残り少ないだろう?」

「うっ……。」

輝夜さんの言葉にぐうの音も出ない、五年も眠ってたせいか成長期が遅いのかわからないけど、僕の身長は昔より少し高くなった程度で一般的にはまだ低いままだ。ただ、昔の服のいくつかは着れなくなってしまったので近いうちに買いに行こうと思ってたけど久しぶりのダンジョン探索に夢中で買いに行くのを忘れてた。

「というか、三人共お仕事は?」

昨日の模擬戦と良い二日連続で仕事しないで僕に付きっきりで大丈夫なんだろうか?昔はいつも忙しかったから、二日連続なんてありえなかったのに。まぁ、僕も色々忙しかったけど。

「ないわよ、そんなもの。五年前とは違うの」

「そう、貴方が眠りにつく前と比べて今のオラリオは平和だ」

「……そっか」

アリーゼさんとリューさんの言葉に安堵と若干の寂しさを感じながらそう答えた。

そうだよね、五年も経ってるんだ、今のオラリオは五年前とは違うんだよね。
「こ〜らっ！」
「いたっ！」
　僕が若干俯き気味になるとアリーゼさんが僕の額にデコピンをはしてきた。ただのデコピンでもＬｖ．６の冒険者が放ったものなので結構痛い。僕が額を抑えて涙目でアリーゼさんを見るとアリーゼさんと一緒に輝夜さんとリューさんも僕の表情を覗き込んでいる。
「辛気臭い顔をするな」
「この時代を造った【次代の英雄】がそんな表情をするものではない」
「そうそう、あの二人に叱られるわよ？」
「皆……。」
　三人は僕の表情から何を考えてるか察してくれたらしい。三人なりに僕を励ましてくれる。僕はそれに答えようと前を向こうとするがアリーゼさんが口にしたあの二人というワードに再び憂鬱になる。
「僕、次の帰省で殺されるかも……。」
「「あっ、うん……。」」
　さっきとは比べ物にならない程にずーんと気の沈んだ僕に三人はその原因をしって

いるためもはや励ましの言葉が思いつかないのか、黙って肩を叩いてくれた。僕もアリーゼさんたちも、昔あの二人に随分な目に合わされてたし、当然といえば当然だけど……。

そして、僕はここにはいない僕の友に心のなかであることを懇願した。

――――ユーリ、出来る限りあの二人の怒りを沈めていてくれ……。

悪の胎動

窓のない暗い空間で二人の人物が椅子に座って向かい合っていた。
片や仮面をつけた男かも女かもわからない人物。
片や全身に銀色のリングでできた穴のある黒い服を着た白いメッシュの入った黒髪の男。
『ツイニ、【聖刃】ガ目覚メタヨウダ』
「いよいよかぁ……これで俺達の計画がようやく開始される」
仮面の人物から発せられる男とも女とも取れない不気味な声に反し、メッシュの男は歓喜の表情で立ち上がり仰々しく両手を広げて見せる。
まるで待ちに待ったイベントに立ち会う子供のようだったが、その顔には恐ろしい笑みを浮かべていた。
「まずはそうだなぁ……あの赤髪の女、なんつったっけ？まぁ、いいやアイツがそろそろ動きそうだし、そこに奴を投入するか？」
『アレハ我々ノ切札デハナカッタノカ？』
「なぁに、気にすることないさ。どの道奴を倒すことはできないんだからな？」

『フ、ソウダッタナ』

自分の顔を仮面の男の顔のギリギリまで近づけて不気味な笑みをこぼす男。それに賛同するように、仮面の人物からは笑みが帰ってくる。

『ナラバ奴ヲ消スノハソノトキニシヨウ』

「駄目だ駄目だ、なんのためにこの5年間生かしておいたと思ってんだ。奴にはまだ役目があるって伝えろうが？」

『ソウカ、奴ニハ力ヲ覚醒サセテモラワナケレバナラナイノダッタナ』

「ああ、アンタには悪いがアイツはそう簡単に死んでもらっちゃあ困るんでな。ちゃあんと力を覚醒させて、それをすべて頂いたあとに……絶望して死んでもらわなきゃなぁ？」

『本当ナラバ、今スグニ殺シテヤリタイガオマエガイウナラ仕方アルマイ。ソレニ、奴ニハ我々ノ5年間ヲ無駄ニシタ罪ヲアガナッテモラワナケレバナ』

そういう二人の間にはドス黒いまでの悪意が蔓延っていた。そう、この二人を繋いでいるのは悪意そのものなのだ。

「俺はスウォルツやティードみたいなヘマはしねぇ。確実に、じっくりと追い込んでいってやるさ」

そう言うと男は懐からあるものを取り出した。それは黒い時計のようなデバイス、男

がそれの上部のスイッチを押すとデバイスが発光し次の瞬間には禍々しい仮面の怪物の姿が描かれたものになった。
【セイバァ……!】
「おらよ!」
　男は完成したソレ【アナザーセイバーウォッチ】を仮面の男に投げ渡す。
「お前んとこのお人形にしっかり渡しとけよ?」
『アア、任セテオケ』
「それと下手なことをするなよ?あんまり過度に接触すると、いつオーマジオウやディケイドに感づかれるかわからないからな。なあ、エニュオさんよ?」
『了解シタ』
「……ふふふ、ハッハッハッハッ!!」
　男は再び椅子にどっかりと座り直し大声で笑い声を上げる。その姿は正しく狂ってとしか言いようのない狂喜だった。
　そして、男は再び両手を広げまるで天に宣言するようにその言葉を放つ。

「さぁ、始まるぜぇ!闇を乗り越えたこのオラリオが破滅と絶望に彩られる最っ高の物

語がなぁ！」

この世界の仮面ライダーの知らぬところで強大な悪が動き始めようとしていた。

太陽と光寵童

「さて、と。服も買ったし今度はどこに行こうかしら?」
　朝食を取ってしばらくして僕達はオラリオのメインストリートへと駆り出した。そこで、服屋により何故かテンションの上がったアリーゼさん達によるぷちファッションショーが行われ、巻き込まれた僕はなすすべもなくきせかえ人形にされ今は完全に疲れ切っている。
「でもまさか、アストレア様まで来るなんて……。」
「ふふふ、私も今日は暇だったしホームで留守番というのもね?」
　それにしても、輝夜さんやリューさんは男物の着物だったり部屋着だったり普通のものを選んでくれたけど、アリーゼさんがスカートを持ってきたときは流石にギョッとしたな……おまけにアストレア様どこから持ってきてたのかウサミミカチューシャ持ってたし……。
「ベルにはきっと似合うと思うの」なんて言われて断ることができなかった僕の心中を誰か察してほしい……。
　そう思っているとリューさんが僕に声をかけてきた。

「ベルはどこか行きたいところはありますか？」
「えっと、僕は「「本屋」」に……って！」
リューさんからの質問に僕と同じタイミングでアリーゼさんと輝夜さんが答えた。
「お前が言うことなど先刻承知だ」
「ベルは昔っから本の虫だったしね」
輝夜さんとアリーゼさんが言う通り、僕は昔から本が好きだった。最初は幼いときによくお爺ちゃんに読み聞かせてもらった英雄譚にしか興味がなかったけど今では本全般が好きだ。自分が知らない知識を与えてくれるある意味で未知の結晶であり先人たちが残した記録でもあるものだから。
そんなことを考えてオラリオのメインストリートを歩いていると……。
「おや？そこにいるのは我が愛しのベルきゅんではないか!?」
「げっ！」
この声、そしてこのフレーズは!?
僕はサッとアリーゼさんの背後に回り込みその後ろでガタガタと震えながら声をかけてきた神物を見る。
月桂樹の冠を被った金髪の男性。彼は興奮した様子で僕達のもとに駆け寄ってくる。
そして、それを見た皆は「またか……」という表情をしている。

「あ、アポロン様……。」
「まさかこんなところで君に会えるとは！やはり私と君はなにか運命的な力で結ばれて
「ないわよ、アポロン」……せめて最後まで言わせてくれないか、アストレア？」
　アポロン様は相変わらず何処か型破りな愛情表現をしてくるが、その言葉をアストレア様が冷たい微笑みでピシャリと遮った。
「久しいな、スラッシュ」
「あっ、はい。一月ぶりですね、ヒュアキントスさん」
「元気そうね、【太陽の光寵童】」
「無論だ、【紅の正花】」
　アポロン様の隣に控えている長身のイケメンさんがアリーゼさんの後ろに隠れた僕に挨拶をしてくれる。
　ヒュアキントス・クリオさん。【アポロン・ファミリア】の団長で昔色々あって剣を交えた仲である。
　色々というのは暗黒期が終わりに差し掛かり平和になり始めた頃、暗黒期ではそんな場合じゃなかったため抑え込まれていたアポロン様の悪癖がそれを機に暴走。
　かなり強引かつ、こう言ってはなんだが姑息な手を用いて自分が気に入った人間を無理矢理自分のファミリアに引き抜くといった行為をしていたのだ。

まぁ、なんというか……僕もそのターゲットに入れられてしまい、【戦争遊戯】の果てに勝利をもぎ取って、それなりのペナルティをかした。
罰金や無理矢理眷属にした人達のの改宗の許可、及び、今後こういった強引な引き抜きはしない。もし上記の約束を破ったら天界に送還するという誓約だ。
ただ、僕への接触禁止とかはないので偶〜に、僕に話しかけに来る。そのたびに目が怖いので、ぶっちゃけ苦手な神様である。
その僕が数少ない苦手意識を持っている神様はアストレア様の冷たい視線に動じず話を続けた。
「全く、そう邪険にしてくれなくてもいいじゃないか？私とて反省したのだ、もうあんな真似はしないとね。なにより、あの戦いで私は学んだのさ」
「学んだ？」
「ああ、互いの【愛】を乗せた刃がぶつかりあったあの戦いは今でも忘れることができない！私はあの戦いを見て真の愛たるはなんなのかを悟ったのさ！」
「は、はぁ……。」
「アストレア、【紅の生花】、【大和竜胆】、【疾風】！ベルきゅんの愛は今は君たちのものだが、いつかが必ず私が振り向かせて見せる！行くぞ！ヒュアキントス！」
「はい、アポロン様。スラッシュ、いずれまた剣を交えさせてほしい」

「はい、勿論です」
興奮した様子で語るだけ語って嵐のように去っていったアポロン様とその後を追っていくヒュアキントスさん。なんというか目覚めた僕のお見舞いに来てくれたときと思ったけど……。
「なんか、面白い人達になりましたね」
「だな……。」
「ええ……。」
「まぁ、悪いことはしてないわけだし放っておいてもいいでしょう。ベルは災難だけどね」
「はい……。」
確かに昔のアポロン様はホントに気に入った人間を手に入れるためなら何でもしたし、ヒュアキントスさんもかなりプライドが高くて残虐な性格してたけど、アレからだいぶ変わったように感じる。
「でも、あんまりベルにちょっかいをかけるようなら、アルテミスでも呼びつけましょう」
「お願いします……。」
そんな話をしながら、僕達は当初の目的である本屋にやってきた。

時計の針は壊れていた

「「あれ？」」
僕達がお店に入ると見慣れた顔が四つそこにあった。
「アイズさん」「ベル」
そこにいたのはアイズさんをはじめとする【ロキ・ファミリア】の女性陣、ティオナさん、ティオネさん、そしてウィリディスさんだった。
「あら、奇遇ね。貴方達も買い物？」
「うん、アイズの服選びのついでにね」
アリーゼさんの質問に答えたティオナさんの言葉にふと、アイズさんの方を向く。確かに、昨日や一昨日来ていた戦闘用の軽装ではなく白い短衣にミニスカート、花をかたどった刺繍が施されていて着こなしているアイズさんがアイズさんだけに金髪相まってとてもよく映えている。
「えっと……どうかな、ベル？」
「す、凄く綺麗だと思います……。」
「ッ……ありがとう、ベル」

「よかったわね、アイズ」
「ムムムムム……！」
　アイズさんの意外な質問に僕は戸惑いながらも率直な意見を返した。なんか、ティオネさんがアイズさんになにか耳打ちしてウィリディスさんが凄い目で僕を見てるんですが、これは如何に？
「ベェ～ルゥ？相変わらず、アイズと仲がいいわねぇ？」
　はっ、殺気!?
　振り返るとそこにはいつかの冷たい目をしたアリーゼさんが……!?
　とりあえず、「帰ったら覚えときなさい」と言われた。僕……何されるんですか？
　どうか、帰る頃には忘れていてくださいと願いながらふと、一人だけ話に入らず本棚を見ていたティオナさんに視線を向けた。しばらく、本棚を見ていた彼女だったがやがて残念そうに声を漏らした。
「あぁ、やっぱりまだ新しいのはないのかぁ……。」
　ティオナさんは本棚に触れながらどうやら、お目当ての本が見つからなかったらしく若干肩を落とす。僕はティオナさんが口にした言葉に若干の違和感を感じ聞いていみることにした。
「やっぱりっていうのは？」

「うん、この本のシリーズ、何年か前から新しいのがでてなくてね……でも、感なんだけどこのシリーズはまだ終わってないような気がするんだ」

そう言って、ティオナさんは本棚から一冊の本を取り出した。

ん？

「その本って……。」

「あっ、ベル知ってる？アタシ、英雄譚が好きでねタイトルに惹かれて読んでみたらもうハマっちゃってハマっちゃって」

「【新英雄伝説空我】？どんな話なんですか？」

その表紙を覗き込んだウィリディスさんがその内容について尋ねる。

「えっとねぇ、古代の戦士の力を受け継いだ戦士が人間を襲うグロンギって言う怪物と戦うんだけど、戦いだけじゃなくて人同士の掛け合いとか心情が凄い細かく書いてあってねー最後の雪山での戦いはホントに感動したんだ！」

興奮した様子でウィリディスさんに説明をするティオナさん。なんか、こうやって熱演されるとちょっと恥ずかしいものがある……。すると、そんな僕の心情を察したのかアリーゼさんが僕に変わっていってくれた。

「あぁ、それベルが書いた本よね？」

「「え？」」

アリーゼさんの言葉にアイズさん以外の【ロキ・ファミリア】の人たちが僕の方を向く。

「暗黒期が終盤に差し掛かった頃、ベルが趣味で書いてたものをヘルメスが本にしてくれたのよ」

「じゃあ、ホントに君がこれを考えて書いたの!?凄いじゃん!!」

「当然よ!私の弟は凄いんだから!」

アストレア様の説明にティオナさんは目をキラキラさせて、本を持ったまま僕に詰め寄ってくる。近い!近い!昨日も思ったけど、この人、他人との距離感が普通より近い!

アリーゼさんも自分のことのように胸を張ってないで助けてよ!

僕は出会ったばかりの頃の大秦寺師匠を真似て、掌で僕とティオナさんの顔の間を遮り壁を作る。僕が困ってると察してくれたのかティオネさんが「困ってるでしょ、離れなさい」と言って妹さんの服を掴んで引き剥がしてくれたのでようやく話ができる。

「いや、僕は夢で見たものを文字に起こしただけで……。僕が考えた内容ってわけじゃ」

「「夢?」」

僕がそう答えると疑問符を再び浮かべる【ロキ・ファミリア】の皆さん。その中でウィリディスさんが一番早くに覚醒し、半信半疑の様子で僕に質問する。

「そ、それって、夢に見た内容だけで一冊の本を書いたってことですか？」
「一冊ではない、ベルが書いた本は確か十一冊あったはずだ」
「「十一ぃ!?」」
三人が同時に驚愕の声を上げた……至近距離だったから思わず耳をふさいでしまった。
なんか、店主のお爺さんも何事かと思ったらしいけど特に問題ないとわかると視線を本棚に戻した。他にお客さんがいなくてよかった～。
「あっ、もしかして……！【金色龍のアギト】とか【鏡界世界の龍騎】とかも？」
「えっと……はい、僕が書きました」
「凄ぉい！あたし君が書いた本全部読んだよ！全部すっごい心に響いた！」
「そのシリーズなら私も読んだわよ、団長との話の種にするために」
「団長も読んでるんですか？」
「ええ、前にお部屋に伺った時、団長の本棚にそのシリーズがきれいに並べられてたのよ。それで、読み始めてみたら意外に面白くて団長も詳しく読み込んでたから話が弾んでね！ありがとう、ベル。感謝するわ」
「あっ、えっと……どういたしまして？」
ティオナさんからのストレートな称賛とティオネさんからのよくわからないお礼を

受けて、さらに照れくさくなって顔を掌で造った壁で隠す。というか、フィンさんも読んでくれてたんだ。
「あれ？でも、作者のところ【カミヤマ】って書いてありますけど？」
「ペンネームです……本名だと恥ずかしいので。師匠の名前から取らせてもらいました」
「それにしても……ティオナさんやティオネさんだけじゃなく団長まで愛読してるなんて……私も読んでみようかな」
「レフィーヤ、ベルの本はおすすめ……私も、いつも読んでる」
「「なっ!?」」
　アイズさんが放った言葉に『新英雄伝説空我』の表紙を悩むように見ていたレフィーヤさんだけじゃなくてティオネさんとティオナさんまで驚愕の表情で固まった。
「あのダンジョンとジャが丸くんしか興味のないようなアイズが!?」
「勉強がだいっきらいなアイズが!?」
「愛読するような本!?」
「ティオネ、ティオナ、レフィーヤ……流石にひどい……。」
　同じファミリアの仲間に散々ないわれ用のアイズさん、無表情がデフォルメなのにそれでもわかるくらいズーンと落ち込んでいる。

アレ、既視感があるような？あっ、今朝の僕か……。

そんなどうでもいいことを考えていると、アイズさんが肩から下げていたポーチからところどころ薄汚れた一冊の本を取り出す。あっ、あの本って……。その本の表紙には一体の魔物と三体の竜を象った鎧を纏う二本の剣を持つ剣士の姿が描かれていた。

そして、題名は――『剣に生きる』。

「この本も、ベルからもらった」

「『剣に生きる』？私この本知らないんだけど」

「それは当然ですわ、その本はベルが一番最初に書いて神ヘルメスが勝手に本にしてベルに渡したものでこの世に一冊しかないものですから」

輝夜さんの言葉を聞いて三人がアイズさんが持ってた本――『剣に生きる』の表紙を見つめる。

「つまり、非売品ってことよね？」

「その本って、アイズさんがいつも持ってる本ですよね？ダンジョンにも持っていってましたし」

あぁ、だからあんなにボロボロなんだ……いつも持ち歩いてくれてたんだ。レフィーヤさんの言った言葉に嬉しさとやっぱりちょっぴり照れくささがある。

「ねぇねぇ、どんな話なの？」

「えっと、ね……「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」――――ベル？」
　ティオナさんの質問にアイズさんが答えようとした瞬間、僕が大声を出して割って入った。
「それは教えちゃ駄目です！アイズさん!!」
「どうして？だって、この本は……。」
「どうしてもです！話すんなら僕がいないところで話してください!!」
「わ、わかった……。」
　僕が鬼気迫る表情と声音で念を押すとアイズさんは渋々頷く。僕が恥ずかしさから息を切らしていると、後ろからアストレア様達がクスクスと笑う声が聞こえてきた。
「なに、笑ってんの？アリーゼさん達？」
「いや、だって……ねぇ？」
「ベル、すみません……！」
「ごめんなさい、ベル。でもこれは無理よ……！」
　僕はアリーゼさん達に恨みのこもった目線を向ける。アリーゼさんは今にもお腹を抱えて笑い出しそうだし、リューさんとアストレア様は必死に笑いをこらえようとしているけど、全然こらえきれてないし……！
「クスクス。まぁまぁ、そのへんでよろしいではないですか皆様？うちの兎様も幼き日

に書いた自分をモデルにした小説を初対面同然の方たちにに読まれていい気分がしないのは当然でございます」

「輝夜さぁぁぁぁぁぁぁぁん!!?」

僕が必死に隠そうとしていることをクスクスと笑いながらあっさり口にした極東美人のお姉さんの名前を絶叫にも似た声で叫んだ。

「え?·この本、ベルがモデルなの?」

「そうよっ!·その本はベルが夢で見た話を文字に起こしたんじゃなくて、自分の経験とかを師匠の小説家を真似て書いたものなのよねぇ、ベル?」

「いっそ、一思いに殺して……。」

アリーゼさんがサラッと暴露した本の内容に僕は恥ずかしさが限界に達し、本棚の影で三角座りになっていた。店の迷惑?·知ったことか……。正義の剣士でも逃げたいときはあるのだ。

「ベル、大丈夫……?」

「うう……ありがとうございます、アイズさん……。」

三角座りで落ち込んでいた僕にアイズさんが心配そうな声と手を差し伸べてくれた。

――でもこうなった原因、貴女なんですけどね……。

「アイズ、帰ったら読ませて!」

「うん、でも……ベルが……。」
「別に構いませんけど、内容に関する質問には一切答えませんので……僕の羞恥心的な問題で。聞くならフィンさんに聞いてください、あの人も読んだはずですから」
僕が若干素っ気なく返すと、再びテンションが上がるティオナさん。これで次あったときに質問攻めになんぞなったときには流石の僕も羞恥心で爆発するかもしれない。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

本屋を離れた僕達はこれもなにかの縁ということで近くの喫茶店で談笑しながら昼食をとったあと、アイズさんのすすめでジャが丸くんを食べながら、街を散策していた。
――――やっぱり、五年も経っているのであったものがなくなっていたり、その逆でなくなっていたものが治ったり、新しいものがあったり……知っている街のはずなのに酷く別のどこかのように感じてしまう。
今朝こんなことを考えていたら皆に見透かされてアリーゼさんにデコピンを喰らったなぁとふと思い、皆がいるはずの前を見た。
――――だが、そこには誰もいなかった。
「――――はぐれた、か」

何故か僕の思考は驚くほどに澄んでいた。なに、焦る必要はないその気になればあの人達が行く場所に僕が先回りすれば良いんだから。アリーゼさんたちもその事は知っているはずだ。

それに――――、

「次、あんな顔をしたら今度はデコピンじゃ済まないしね」

「あれ、ベル君？」

そんなナイーブな事を考えていると、聞き慣れた声が聞こえてきた。

そこにいたのは鈍色の単発の女性、自分が言うのはおかしいけど五年前は若干の幼さを感じた顔立ちはお姉さんに似て凛々しい顔立ちになっていた。

「アーディさん」

「やっぱり、ベル君だ！どうしたの、こんなところで？」

そこにいたのは僕達とは違う形でオラリオの治安を守る【ガネーシャ・ファミリア】のアーディ・ヴァルマさんだった。アーディさんは僕の顔を確認すると笑って駆け寄ってきた。

僕は彼女に皆とはぐれてしまったことを話すと、アーディさんはクスクスと笑い出す。

「君の迷子癖は相変わらずだねぇ」

「ハハハ、フィルヴィスさんとかにも言われましたよ。最も、五年も前ですけどね」
「……どうしたの？」
「？」
「寂しそうな目をして」
――僕って、そんなにわかりやすい顔してるかなぁ……。
いや、これはアーディさんならではかな……。この人の前だと何故か【アストレア・ファミリア】の皆の前でも口に出せない弱音が何故か自然と口からこぼれてくるのが不思議だ。
「ここは僕が知ってるオラリオじゃないんですね……。」
「え？」
「僕にとってのオラリオは誰かの明日のためにひたすらに走っていたあの場所……もちろん、あの頃に戻りたいなんて思ったことはないですけど、ただ、なんていうんですかね……僕だけ時間が止まったような……そんな気がしてならないんですよ」
近くの民家の壁に体を預けながらそんな言葉がポツポツとこぼれてくる。
――昔、とある魔王様に僕に剣士以外の仮面の戦士の歴史を見せてもらったことがある。
その中で彼自身の歴史で彼が言った言葉。

『時計の針はさ、未来にしか進まない。ぐるっと一周してもとに戻ったように見えても……未来に進んでるんだ』

だが、もし時計の針が壊れてしまっていたら?それは果たして、本当に進んでいると言えるのだろか?

――――時計(僕)の針は今、前に進めているだろうか?

【アストレア・ファミリア】の皆も、アイズさんも確かに前に進んでいた、しかし、僕の時間は……きっとあの場所で止まってしまったんだろうな。

「よしっ、ベル君!あそこにいこう」

「あそこ?」

何かを思いついたようにパンと手を叩いたアーディさんはオラリオを囲う高い外壁へと視線を向ける。そして、僕の顔を見て親指でそこを指差しながら一言こういった。

「もやもやするんならさ、ひとっ走り付きってよ!」

クロスセイバー登場記念・とりあえず書いてみた！

仮面ライダージオウの参戦により、ソロモンに奪われていた聖剣とライドブック、そして、仮面ライダーの力を取り戻したベル。そして、ジオウはソロモンと決着をつけようとしたが。

「待ってください、ソウゴさん！」

「？」

「ここからは僕達にやらせてください」

刃王剣を肩に担ぎジオウの前に出るベル、その突然の行動にジオウ達はもちろん他の冒険者もソロモンさえも唖然とする。しかし、ベルの真剣な表情に誰も言葉を発せない。

「ここは僕達の世界です、僕達の世界の落とし前は僕達でつけます」

「――――本気なんだね？」

ジオウの仮面越しの問答にベルは臆することなく頷く。それを見たジオウはゆっくりと自分のベルトに手をかけてオーマジオウウォッチをジクウドライバーから外して変身を解除する。

「任せたよ、ベル」
「はい」
「おっ、おいなにやってんだ【聖刃】!!?」
「その人達に任せておけば勝てるんだぞ!?」
　ようやく、状況を理解した冒険者達が慌ててベルを止めようとする。確かにジオウが戦えば神を取り込んだソロモンすら倒せるだろう、だが、ソロモンが勝てばこの世界はソロモンが生み出す地獄に作り変えられてしまう。彼らの言うことは最もだ。

「貴方達はそれでも冒険者かッ!!!?」

　――――ベルの叫びでざわめいていた冒険者たちは一気に静まり返る。
「僕の知っている冒険者はどんな危険が待ち受けていようと、『未知』を求め冒険に挑む。それが、冒険者だ。こんな世界で一度しかない未知、神の力を人が乗り越えるチャンスを見逃しますか?」
　ベルの迫力と言葉に気圧され、今度こそ何も言えなくなる冒険者たち。そして、続け

て、
「それとも、世界を救う英雄になるチャンスを見逃す人がこのオラリオにいるんですか？」
　ベルがニヒルな笑みを浮かべて背後で膝をつく冒険者達に視線を向けると、冒険者一同は一瞬ポカンとする。
「――――ぷっ！そうね！折角与えられたチャンスをみすみす捨てるなんて冒険者としてあるまじき行為だわ！」
「えぇ、これほどの冒険を傍観者で終えるのは惜しい！」
「全く羨ましい限りだ。団長、リオン、あの馬鹿を任せたぞ」
　ベルの激励にまずアリーゼとリューが目の前に刺さる、火炎剣と風双剣を抜きベルの隣に並び立つ。
「アーディ……。」
「お姉ちゃん、私も行くよ」
「そうか……多くを言うつもりはない、必ず勝ってこい」
「うん！」
　続いて姉の激励を受け水勢剣を抜くアーディ、
「行って来い、フィン」

「儂等の分もぶちかましてこい」
「団長、ご武運を！ティオナ、しっかりサポートするのよ!!」
「負けたら、ただじゃおかねぇぞ」
「英雄、か……一度は諦めたそれをまさか世界を救うなんて偉業で手に入れる日が来るなんてね」
「よ～し、やってやろうじゃん!!」
　仲間達の言葉を背負い時国剣、土豪剣を抜くフィン、ティオナ、
「ま、まさか、こんな日が来るなんて……。」
「しっかりしなさいよ、ラウル！」
「いたぁ！アキ……？」
「私達が手にできなかった称号をアンタが代表してとってきなさい！」
「俺たちの意地を見せてやってくれ！」
「頼んだぞ、ラウル！」
「皆……わ、わかったっす！男ラウル、世界を救ってくるっす！」
　たくさんの英雄の背中を見せられ英雄の夢を諦めていた、英雄の隣でそれを見るだけで満足していた自分を捨てて一人の英雄として音銃剣を抜き立ち上がるラウル、
「全く、まさかこんなことになるなんて……。」

「なにを贅沢なことを言っているんだ」
「そうそう、行ってきなよアスフィ」
「ファルガー、ルルネ……。」
「そうだぜ？俺の眷属が世界を救うなんてこれ以上の名誉はないんだ、行ってきなさいアスフィ」
「ヘルメス様まで……はぁ、わかりました。久しぶりに冒険をしてみましょう」
　仲間達と主審達からの後押しを受けていつもヘルメスに振り回された後と同じような、しかし、どこかワクワクしているような表情で煙叡剣を抜くアスフィ、
「俺たちも行くぞ、ババト」
「はっ！まさかこの俺が世界の破滅を止めるために剣士共と肩を並べる日が来るとはな」
「それはつまり、飛羽真が言っていた変わる力をお前も持っていたということだな。最光だな!!」
「ふっ……言ってろ」
　千年前に失ってしまった友情を取り戻し、光剛剣と無名剣を抜くユーリとババト、
「アイズさん、フィルヴィスさん」
　レフィーヤは地面から抜いた雷鳴剣をアイズに、闇黒剣をフィルヴィスに差し出す。

「ありがとう……レフィーヤ」
「……私にその剣を握る資格は」
「フィルヴィスさんッ!!」
　真っ直ぐと雷鳴剣を受け取ったアイズとは対象的に一度は伸ばした手を引っ込めてしまうフィルヴィス、だが、レフィーヤはその手をとって、闇黒剣を握らせる。
「行ってください、フィルヴィスさん。私達の分まで」
「レフィーヤ……。」
「それで終わったら、また一緒にダンジョンに行きましょう。……そのためにも勝ってください」
「……わかった」
　レフィーヤに背中を押され暗黒剣を強く握りしめアイズとともにそれぞれの聖剣を握った剣士たちとともに並び立つフィルヴィス。
「ふっ、ハハハハハハ!!!笑わせてくれる！オーマジオウならいざしらず、いくら聖剣が貴様らの手に戻ったとて、神すらも取り込んだこの俺に叶うと思っているのか!?この力の前には貴様らなどゴミクズに過ぎないというのがまだわからないのか!?」
「わかってないのは、アンタよ」
「なにい？」

ジオウが下がったことで優位に戻ったソロモンがここぞとばかりに自分の力をひけらかすが、アリーゼが冷たい言葉でピシャリとそれを遮った。
「あぁ、不思議なもので聖剣が戻った今君からはそれほどの驚異を感じない」
「ホンット！ゴブリンのほうがまだ怖いくらい！」
「ティオナさん、それは言いすぎじゃ……いやそのとおりっすけど」
「貴様らぁ！」
続けてフィン、ティオナ、ラウルからの挑発を受け、仮面の下で青筋を浮かべるソロモン。だが、剣士たちの口撃はまだ止まらない。
「貴方の力はベルが全知全能の書の欠片からかきあげた彼の歴史です」
「そっ、ベル君の思いやりや優しさで綴られた物語なんだよ」
「貴様のような邪悪な心を持つものが使いこなせる代物ではない」
アスフィ、アーディ、リューが追撃する。
「貴様の力はベルの力の表面、つまりハリボテに過ぎんというわけだ」
「そう……ベルはもっと強い」
「人形風情がぁ……調子に乗るなぁ!!」
激昂が頂点に達したソロモンは【神の力】をまとわせたカラドボルグを剣士たちに向けて振り下ろし赤黒い斬撃が剣士たちに向かう、それに対し、ベル達剣士たちは逃げる

ことをせず、ただ自分の聖剣を構える。
『はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!』
剣士たちが叫びとともに振り抜いた聖剣はソロモンの斬撃を粉々に打ち砕く。
「見てのとおりだ、貴様の力程度でこいつらの心は決して折れたりはしない」
「この程度で折れる連中ならこの世界はとっくに俺が無に帰している」
「おのれぇ……!!!」
ことごとくこけにされ、ソロモンのプライドは既に粉々だった。この上は今すぐに目の前の剣士たちを血祭りにあげ、このオラリオを滅ぼそうと考える。だが、
「お前なんかに僕達の物語の結末を決めさせない……僕達の物語の結末は」
『僕（俺）（私）達が決めるッ!!!』
剣士たちを率いて前に出たベルの号令代わりの言葉に剣士たちは己のライドブックを構える。
【ブレイブドラゴン！】
【エモーショナルドラゴン！】
【ライオン戦記！】
【ランプドアランジーナ！】
【玄武神話！】

【猿飛忍者伝！】
【ヘンゼルナッツとグレーテル！】
【ジャアクドラゴン！】
【エックスソードマン！】
【昆虫大百科！】
【オーシャンヒストリー！】
【エターナルフェニックス！】
　ガードバインディングを開き、ライドブックを聖剣に装填する。そして、ベルが刃王剣を抜刀するのを合図に全員が叫ぶ。
「変身!!」
『変身!!』
【聖刃抜刀！】
【刃王剣十聖刃！創生の十字！煌めく星たちの奇跡とともに！気高き力よ、勇気の炎！】
【クロスセイバー！クロスセイバー！クロスセイバー！】
【交わる十本の剣！】
　銀河の輝きとともに変身する仮面ライダークロスセイバー。そして、それに続く十一人の剣士。

仮面ライダーセイバー・エモーショナルドラゴン。
仮面ライダーブレイズ・ライオン戦記。
仮面ライダーエスパーダ・ランプドアランジーナ。
仮面ライダーバスター・玄武神話。
仮面ライダー剣斬・猿飛忍者伝。
仮面ライダースラッシュ・ヘンゼルナッツとグレーテル。
仮面ライダーカリバー・ジャアクドラゴン。
仮面ライダー最光・エックスソードマン。
仮面ライダーサーベラ・昆虫大百科。
仮面ライダーデュランダル・オーシャンヒストリー。
仮面ライダーファルシオン・エターナルフェニックス。
正史の歴史ですら揃うことのなかった十二人全ての剣士が時空を超えて今ここに集結した。
「見ていて、叔父さん、お義母さん。これが貴方達が望んだ英雄の姿です！
――行くぞぉっ！」
『おうっ！』『はいッ！』『うんッ！』
クロスセイバーが駆け出し、それをひきりに剣士たちとソロモンとの最後の戦いが幕

を開ける！

過去【静寂】ｖｓ大鐘楼の【炎の剣士】

「それで、貴女は諦めたのか……？」
「なに？」
幼き炎の剣士はかつての英雄【静寂】のアルフィアの言葉に瀕死の身体にムチを打ちながらそう答えた。
「黒竜の力に絶望して、全てを今の冒険者に押し付けて、自分達は諦めて逃げるのかって聞いてるんだよ!!」
少年は決して倒れないように火炎剣を杖のようにして持ち、絶対に倒れないという意志のこもった瞳をアルフィアに向ける。
【アストレア・ファミリア】や他の面々は絶対的な力の差を見せつけられてなお決して折れないベルを唖然として見つめる。
「……確かに人は絶望する、だけど、そのたびに立ち上がる強さが人にはある」
「そんなものはただの詭弁だ。黒竜の力を知らない子供の戯言だ」
師の言葉を借りたベルの主張はアルフィアの一言で切り捨てられる。まるで彼女が嫌う雑音だと言い切るように。しかし、ベルはなおも食ってかかる。

「違う！僕は確かに見てきた、人間の強さを！・貴女はそれを見ようとせずに勝手に諦めて、自分の運命に、未来に立ち向かわずにただずっと逃げていただけだ！」

彼の胸には彼が憧れ、慕う十人の剣士の姿があった。

ーーー炎の剣士はすべてを救うため。

ーーー水の剣士は家族を守るため。

ーーー雷の剣士は友を守るため。

ーーー土の剣士は未来を担う子供達のため。

ーーー風の剣士は正義をなすための強さのため。

ーーー音の剣士は一族の伝承を信じ見届けるため。

ーーー闇の剣士は大切な息子の未来を守るため。

ーーー光の剣士は世界を形作る人を守るため。

ーーー煙と時の剣士は世界を守る剣士の誇りを守るため。

彼らは聖剣を振るい巨悪を打ち破った、千年の絶望に囚われていた【不死身の剣士】の心すらも救ってみせた。

その背を見せられてこの程度の絶望で諦めるなど、彼にできようはずがあるだろうか？

いや、ないッ!!

「黙れッ、そんなものは黒竜がもたらす絶望の前にはなんの意味も持たない。私の言葉を否定したいのであれば力を示せ、黒竜すらも打ち倒す力を！」

アルフィアの言葉に徐々に感情がこもり始めた。

「だったら……僕が、僕達が！貴女達が望んだ未来の、その先を創ってみせる！」

そう言って小さな炎の剣士が火炎剣を構えると、火炎剣の刀身と彼の胸がひかり、そこから二体の竜が空に飛び立ち彼の掌で二冊のライドブックとなる。

【エレメンタルドラゴン！】

【プリミティブドラゴン！】

「これは……！」

少年がその光景に驚愕しているとその視界が切り替わる。

見覚えのあるその場所は嘗て暴走したときに彼の意識が迷い込んだ空間。そして、そこにいたのは二人の人物。

「師匠、それに、君は……。」

一人は彼が誰よりも憧れる師匠の一人、そしてもう一人は、本の化身たる太古の竜がベルと同じ年頃の少年の見た目となった姿。

「力を、貸してくれるんですか？」

ベルが二人にそう尋ねると彼らは笑顔を浮かべ頷き返す。その表情はまるで戦いに

行く我が子を見守る親のようで、あるいは大切な友へ向けるものにも見えた。
そして、視界が元に戻り再び彼の目の前には義母が立ちふさがる。ベルは彼女を真っ直ぐと見据えて赤いライドブックのページを開く。
【そして、太古の力と手を結びすべてを救う神獣となる……。】
荘厳なライドスペルが鳴り響き、その力を開放する。
【プリミティブドラゴン！】
【エレメンタルドラゴン！】【ゲット！】
続いてもう片方のライドブックを展開し、忘却の果に失われてしまった伝承の空域【ゲットシェルフ】に彼の師が新たに綴った物語の続編たる【エレメンタルドラゴンワンダーライドブック】をセットする。
一つとなったライドブックを頭上に構え、そのまま勢いよく振り下ろしソードライバーに装填する。
「女神アストレアに誓う……僕は僕の、正義を貫く!!」
誓いの言葉を口にし、火炎剣烈火を抜刀する。
【烈火抜刀！】
背後に合体したライドブックが降りてきて、いつものセイバーとは違い炎の十字を描くのではなく、炎を纏う刃を両手で地面に突き刺すように持つ。

「ウオォォォ!!変身ッ!!!!ハァッ!」
【バキボキボーン!メラメラバーン!シェイクハンズ!エレメンタルドラゴン!】
【エレメントマシマシ!キズナカタメ!】
右手に持ち直した烈火を振り抜くとライドブックが開き、二体の竜がその姿を現す。
ーーー太古の力を秘めた禁忌の骨竜【プリミティブドラゴン】。
ーーー超自然の力を司る炎の元素竜【エレメンタルドラゴン】。
二体の竜はベルの周囲を飛び交い、やがて互いの手を握りその力がベルに宿り、彼を新たなるセイバーへと変身させた。
両手両足の先は青い骨竜の力を、それ以外は赤とオレンジの炎を模した元素竜の力を宿し、その両肩から胸部にかけて固く握られた竜の手。
その名を【仮面ライダーセイバー・エレメンタルプリミティブドラゴン】。
「あの力を御しきったのか……?」
「ベル、やったのね……!」
アルフィアと【アストレア・ファミリア】はあの荒れ狂う骨竜の力を使いながら、暴走した様子のないセイバーに驚愕する。
「違うよ。御したんじゃない、力を合わせたんだ。僕は……この力で、全てを救う!!」
セイバーは静かな口調で答えながら剣を構える。

「いいだろう、かかってこい。炎の剣士！」
「いくぞ、【静寂】のアルフィア！」

そこから繰り広げられるのは正しく英雄の戦い。

目まぐるしく行われる攻防、戦うたびに衰えることなく、いや、それどころかさらに早くなっていく剣速。そして、強くなる想い。
「【福音】！」
彼女の魔法をセイバーが風と水の力で無効化し、火炎剣を振るうと彼女はそれを間一髪で交わし手刀を見舞う。
【エレメンタルドラゴン！】
だが、その攻撃がセイバーの命を刈り取ることはなく元素竜【エレメンタルドラゴン】の力によってその姿は炎となってあたりに飛び散り再びセイバーの姿へと戻る。
「ちっ！またか……！」
その能力に忌々しげに舌打ちを吐くアルフィア。

「す、凄い……。」
「あの暴走した力を完璧に制御している……。」
「あれが本来のプリミティブドラゴンの力」
【アストレア・ファミリア】の面々、アリーゼ、輝夜、リューはその力に驚愕し、目を見開いてその光景を見ていた。
「それにしてもあいつ、一体何があったんだ?この間と別人じゃねぇか」
ライラの言うとおり、以前の家族と敵として対峙したショックで自分を見失っていた彼とは明らかに違う。
「魔王様に背中押されたって言ってたわよ」
「団長、その魔王というのは誰だ?」
「知らないわ!」
「なんで胸を張るんだ、馬鹿団長!?」
目の前で行われている激闘を脇目にコントじみたことをする正義の眷属達。
「ベル一人にあそこまで頑張らせて、お姉ちゃんがこんなところで寝てるわけには行かないわよね!」
「ああ、そうだな」
「勿論です!」

彼の正義の剣士に掻き立てられ、自ら立ち上がり神獣の触手へと立ち向かう。
そんな会話の中、セイバーが振り下ろした剣を避け手首を掴みアルフィアはセイバーに肉薄する。
「なぜ、お前なんだ……。」
「？」
アルフィアが再び手刀振り下ろす瞬間、耳に響いた愛しい声にセイバーは一瞬疑問符を浮かべるが再びその身を水の元素に変えて回避する。
「なぜ最後に私達の前に立ちふさがる英雄がお前なんだ……ベル!!」
「……お義母さん」
あの戦い以来初めて彼女を母と呼んだ。かつて村で一緒に暮らした恐ろしくも優しい母の姿をセイバーは、ベルは見た。
「……僕だって絶望した」
「なに？」
「何度も、何度も何度も絶望の未来を見た。だけど、そのたびに皆に支えられた。未来への希望を見た！なにより、」
仮面の下で顔をほころばせ愛しい家族へと笑顔を向ける。
「貴女達を救いたい、その想いが僕をここまで強くした!!」

ベルの思いに呼応し、炎の聖剣【火炎剣烈火】は強い輝きを放つ、それはかつての神山飛羽真にも負けない輝きだった。
「想いの強さが力になるんだ！」
【必殺読破マシマシ！】
火炎剣をソードライバーに納刀し、ライドブックのページをタップすると、エネルギーの増幅音が鳴り響く。この戦いを終えるための必殺の一撃を放つために。
しかし、本来鳴り響くはずの刺々しい音は流れず流れるのはゴォン！ゴォン！という鐘の音。その音は少しずつ音を高めていく。
「【祝福の禍根、生誕の呪い。半身喰らいし我が身の原罪】」
そして、その鐘の音に答えるようにアルフィアは詠唱を始める。向こうが鐘の音ならそれは正しく歌の音。
「【禊はなく。浄化はなく。救いはなく。鳴り響く天の音色こそ私の罪】」
これより放たれるのはこれまでの短文詠唱とは比べ物にならない極大魔法。
「【神々の喇叭、精霊の竪琴。光の旋律、すなわち罪過の烙印】」
凄まじい魔力を放つアルフィア。彼女の戦闘技術なら並列詠唱など簡単、寧ろセイバーが剣を収めた時点で勝敗はついていた。
「【箱庭に愛されし我が運命よ――砕け散れ。私は貴様を憎んでいる】！」

だが、彼女には……それができなかった。
見違えるほどに強くなった愛しい息子に最後にできる自分なりの手向けを与えたかった。
「代償はここに。罪の証をもって万物を滅す】」
そして、ついに時は訪れる。
「【哭け、聖鐘楼】！」
【烈火抜刀！】
詠唱は終わりを告げる、これより放たれるはかつて海の覇王、リヴァイアサンすらも打ち倒す咆哮。
そして、それに合わせて聖剣をドライバーから抜刀する。彼の刃には炎、水、風、土の四大元素の力が宿っている。
「【ジェノス・アンジェラス】！」
「物語の結末は、僕が決める……!!」
【エレメンタル合冊斬り！】
「【森羅万象斬】!!はあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
優しい母の声から放たれる滅界の咆哮、そして、太古と元素竜の力を合わせた必殺の斬撃が衝突する。

階層全体を震わせる二つの力の衝突。そして、視界を埋め尽くす極光。
「うっ、うぐぅぅぅぅ!!!!」
拮抗していた力はやがてセイバーを押し始める。苦悶の声を漏らしながら必死に立ち向かう。そして、師から託され、魔法の詠唱となったあの言葉を口にする。
「【覚悟を超えた先にーーー希望はある】!!」
その詠唱で【火炎剣烈火】の刀身の輝きは最大に達し、その力を開放した。
ーーー大鐘楼の音が彼女の咆哮を相殺した。
「「くっ……!」」
互いに最大の力を放ち膝をつく二人の戦士、セイバーのソードローブはパラパラと解除され、アルフィアも倒れる。
「ごふっ……!」
しかも、アルフィアは咳き込み口から血を流す。彼女の体を蝕む病魔が彼女が戦う力がなくなるのと同時に活性化したのだ。
「はぁ……はぁ……。」
ベルは火炎剣を片手に持ちながらアルフィアに近づく。
「お義……母さん……。」
「私に、そう呼ばれる資格はもう、ないだろう?」

「ッ！」
　辛そうに苦しそうにそう答えるアルフィアの目の前に火炎剣を付きたて、そのまま彼女を強く抱きしめる。
「そんなこと言わないでよ……。」
「……ベル、お前は私にとって唯一の希望だった……メーテリアを失った私にとっての唯一の」
　アルフィアは完全に砕けてしまった『絶対悪』の仮面を剥がし、愛しい息子の顔を撫でる。
「本当に強くなった……。」
「……ユーリ」
「ああ、任せろ」
　ベルが倒れていたユーリに声をかけると、光の剣の力でアルフィアに治癒の光を放つ。
「やめろ。そいつの力がどれほどのものかは知らないが、もう手遅れだ……。」
「お義母さん、僕いったよね？『想いの強さが力になるんだ』って」
　ベルは自ら突き刺した火炎剣を抜き、今も戦う仲間達の背中を見る。
「見てて、僕の戦いを……そして、想ってほしいこの先を見届けたい、と。」

【烈火抜刀！】

【ブレイブドラゴン！】

再びセイバーに変身したベルは最後の戦いに見を投じた。